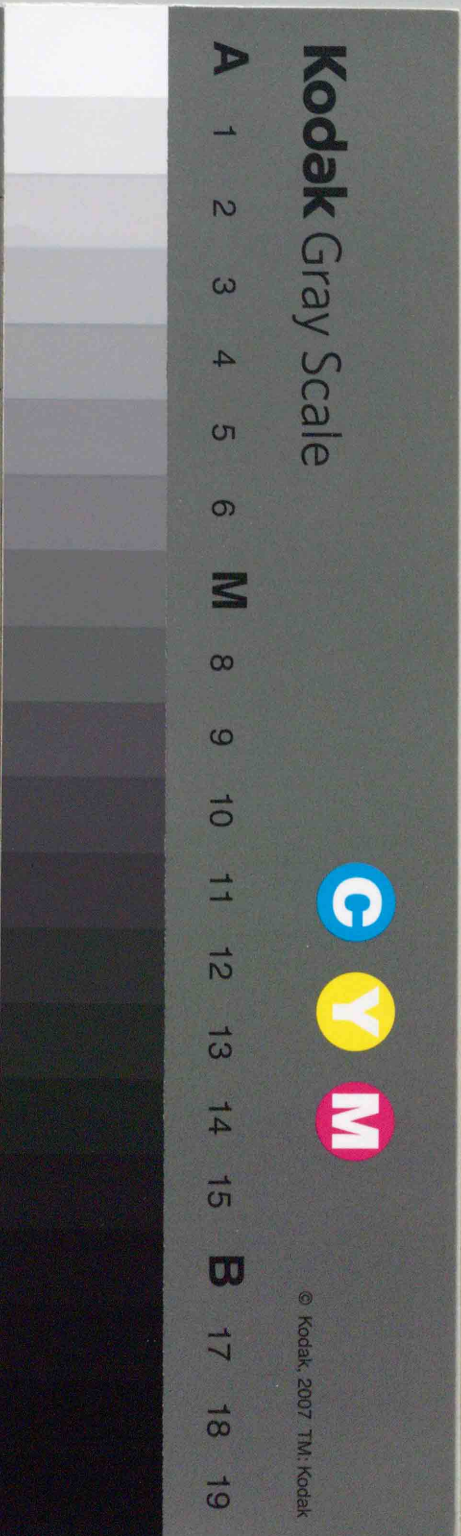
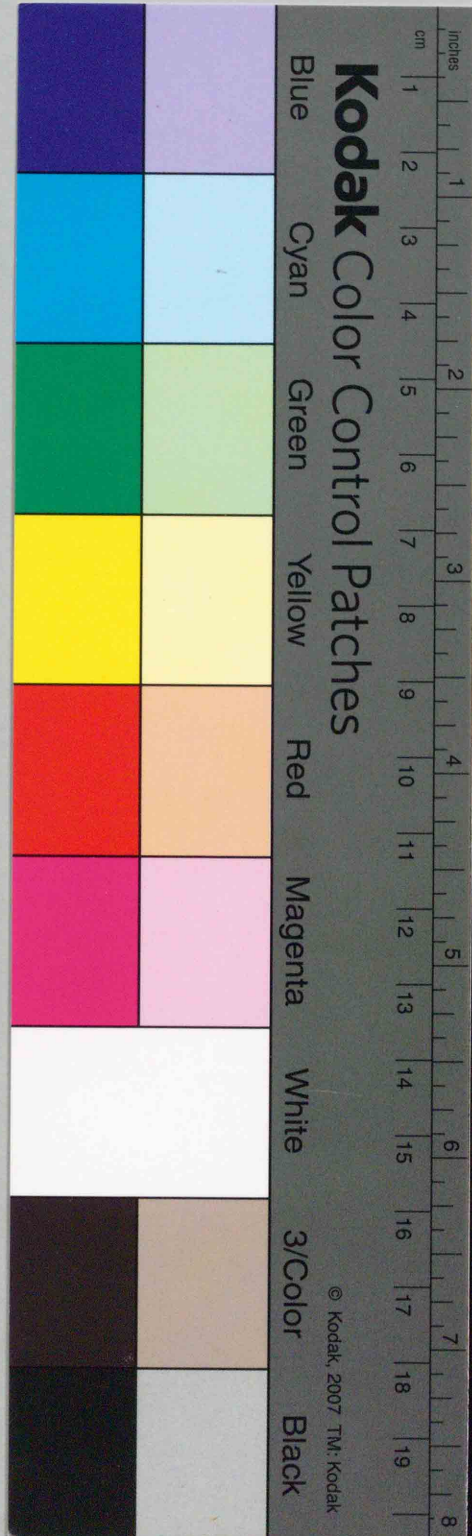
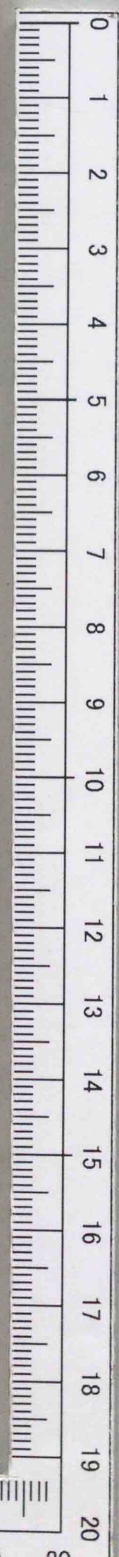


訂補  
新體國語教本

藤岡作太郎編纂  
藤井乙男訂  
六

375.9  
Fu10  
資料室



42069

教科書文庫

4
810
41-1912
200030 2358

7105





3759  
Fu10

文部省檢定  
大正十年九月十日  
中學校國語科用

訂補  
新體國語教本

文學博士藤岡作太郎編纂  
文學博士藤井乙男補訂



東京 開成館藏版

卷六目次

- 一 尊王論の曙光……………一
- 二 白石のおひたち……………六
- 三 大田道灌……………二
- 四 老船長……………一六
- 五 聯合艦隊告別ノ辭……………一八
- 六 國旗と軍旗……………三三
- 七 遊就館の古武器……………二六
- 八 愛郷心……………三一
- 九 犠牲的精神……………三五

目次

一〇	志士の最期	三六
一一	農夫の歌	四二
一二	イギリス人とフランス人	四四
一三	海上の壯遊	四九
一四	高田屋嘉兵衛	五八
一五	大阪	六四
一六	木曾の奇勝	七〇
一七	秋の歌	七六
一八	圓山應舉	七七
一九	鎮守の森	八三
二〇	栗	八八

二一	逗子の冬	九〇
二二	鳥居元忠	九三
二三	宇津木靜區	九五
二四	病床より	一〇一
二五	手紙のかき方	一〇四
二六	古羅馬氣質	一〇七
二七	山岡鐵太郎	一一一
二八	日蓮上人	一一八
二九	田舎と偉人	一二三
三〇	都人の手紙	一二五
三一	農業は健康を養ふ	一二九



補訂 新體國語教本卷六

一 尊王論の曙光

明治の維新は王政の復古なり、王政の復古は古代の研  
 究に基づく。幕政の抑壓を屑しとせず、士氣の沈滯を慨  
 くもの、古史を繙きてそゞろに王朝の盛代を懷へり。幕  
 末の世、志士が崛起して尊王論を唱へ、遂に懷府を瓦解  
 せしめたるは、その初を尋ぬれば、これらの學者が研鑽  
 の影響を受けたるなり。

徳川光圀は家康の孫にして、水戸侯頼房の第三子なり

研鑽

屑しとせず

超えて  
案しし

彰考館



徳川光圀 図

き。兄を超えて家を嗣ぎたれども、常にその昆弟昆弟の分を案ししに安んぜず、史記の伯夷傳を讀みて益、この感あり、深く歴史の必要を覺れりと傳ふ。修史は實に光圀の素志なり、遂に小石川の邸内に彰考館を設け、著名の學者を聘し、御府の祕書を借り、國內の逸書を求め、儒臣をして古代の歴史を編述せしむ。初はこれを史稿といひ、朝廷を憚りて名を命ぜざりしが、子孫相繼ぎてその補修に當り、

纂輯  
監督

徵證

大義名分

謚

また勅許を得て大日本史と稱せり。光圀の史臣をして纂輯に従はしむるや、自らこれを監督す。その意見によりて古來の説を改定したるもの三箇條あり、神功皇后を后妃傳に收め、弘文天皇を本紀に掲げ、神器の所在を徵證として吉野朝を正統に立てたること、これなり。皇統の正閏を明かにし、大義名分を重んずるがその本意なりしこと、以て知るべし。光圀深く皇室を畏敬し、毎歲元旦には必ずまづ西に向つて宮闕を遙拜したりといふ。また正成の遺烈を慕ひ、碑を湊川に建てて、嗚呼忠臣楠子之墓と題せり。義公の謚空しからず。後世、水戸が尊王論の一方の中心となりたるも、故

萬葉集  
註釋

卓拔

古文辭

闡明

國學

唱道

あるかな。

光圀また難波の僧契沖に託して、萬葉集を註釋せしめたり。契沖深く心を古代の典籍に潛め、識見も極めて卓拔なりしが、その從事せるところはなほ古文辭の學に止りぬ。上世の制度、習俗を究めて、國民の特性、固有の大道を闡明したるは、ついで京に出でたる荷田春滿あつたまろにして、國學は即ちその唱道によりて立ちたるなり。

春滿は伏見稻荷の祠官なりき。幼より復古の學に志し、



荷田春滿

因循

獨得

道かは

儀表

帷を垂る

博洽

當時、殿上家が門閥に據り、因循に流るゝを慨き、師とするところなくして獨得の見を立つ。嘗て詠じて曰く、

踏み分けよ、倭にはあらぬから鳥の跡を見るのこ人の道かは。

又曰く、書を著すも道の爲、世の爲、人の爲にこそは著すめれ」と。その國史、律令を學び、學問の消長、道義の興廢を説きたるもの、一にこの抱負を實現し、淳良なる上古の風を儀表として現代の弊習を矯めんとしたるもの、外ならず。賀茂真淵が帷を江戸に垂るゝに及びて、その學海内を風靡し、博洽なる本居宣長は先哲の説を完成し、氣概ある平田篤胤は皇國の大道を提げて天下に宣

鼓吹

傳す。尊王愛國の念はかくの如くして鼓吹せられたるものにして、維新の際における勤王家には國學者も多かりしなり。

二 白石のおひたち

記しし草紙  
おはせし人  
友なる人

上野物語とて、寛永寺の花見に人の群れ來る事どもを記しし草紙ありけり。吾三歳なりし春の頃ふやあるべき、火燧に足をさして腹ばひ居て、その草紙を透き寫したり。母にておはせし人の見給ひ、十の中一二をまことの文字もあるを、おが父に見せまゐらせられしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞き傳へて、その寫

寫しし物

題せしに

しし物どもを取り傳ふることふなりけり。吾十六七歳の時、上總の國小行きしに、かしこふてその頃寫しし物を見よりき。又その頃屏風におが名を題せしに、二字はその體をなしたるもの、後までありしが、火に焼け失せたりければ、今はその頃の物はおが許には残らず。この後お常の戲に筆執りて物書くことのみしければ、おのづから文字をも見知りたれど、師友とすべき人なかりしらば、たゞ往來物の類おど讀み習ふのみありき。戸部の家人に富田とて、生國は加賀國の人と聞ゆしが、太平記の評判といふ事を傳へて、その事を講ずるあり、夜々にわが父おど寄り合ひつゝ、これを講ぜしめらる。

戸部は久留里藩  
主土屋利直、そ  
の官が民部少輔  
なる故いふ



吾四五歳の時に、常にその座に侍りてこれを聴くに、夜  
いさく更けぬれど終にその座を去りしこともなく、講  
畢りぬればその義を請ひ問ふことあどもありしを、人  
人奇特のことありといひき。

七言絶句  
解き聞かせし

六歳の夏の頃、上松といひし人のいさゝり文字などあ  
りしが七言絶句の詩一首教へて、その意を解き聞かせ  
しに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、  
人にも講じ聞かせたりき。この兒文才あり、いかにも師  
を選びて學ばしめらるべし。など、かの人もいひしかど、  
頑なる昔人どちのいひしは、昔より言ひ傳へし事あり、  
利根、氣根、黄金の三こんなくしては、學匠になり難しと

學匠

教へしめられ  
き

復、又、亦

いふなり。この兒利根こそ生れ付きたらめ、猶幼くして  
氣根の程も計り難く、家富めりとも見ねば、黄金の事  
も心得られず。など言ひ合へり。とが父も、汝、戸部の御い  
つくしみに由りて、常に御側を離れまゐらせねば、學に  
入れ師に従はしめん事も叶ふべからず。されど幼きよ  
り物書くことをば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしこ  
となれば、せめて物をば書き習せしめたくこそあれ。と  
とが八歳の秋、戸部の上總國に行き給ひしあとにて、手  
習ふことを教へしめられき。

その冬の十二月半ばに戸部歸り給ひしかば、常に傍に  
侍ふこと元の如し。あけの年の秋、復國に行き給ひしあ

課...満たざる  
課も満てたり

とにて、課を立て、日の中には行草の字三千字、夜に入りて一千字を限りて書き出すべしと、命ぜられたり。冬に至りては、課未だ満とざるに日暮れんとすること度々にて、西むきなる竹縁の上に机を持ち出でて、書き終へたることもあり。



新井白石

新 又夜に入りて手習ふに、  
白 睡の催して堪へ難きに、  
石 吾に附けられし者と竊に計りて、水二桶づゝかの竹縁に汲み置かせ、痛

課をも満てたり  
課も満ちたり

く睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄ててまづ一桶の水をかぶりて、衣うち着て習ふには、はじめ冷なるに目覺むる心地すれど、しばし程經ぬれば、身暖になりて、またく睡くなりぬれば、復水をかぶること前の如くす。再び水をかぶりぬる程には、大やうは課をも満てたりき。これより九歳の秋冬の間の事なり。

新井白石

### 三 大田道灌

薙髮

大田持資、薙髮して道灌と稱す、關東管領上杉定正に仕へて、江戸城に居たり、勇敢にして武略あり、民を愛し、敵を破り、主家をして東國に雄視せしむ。また築城の術に

川越、岩槻共に  
武蔵國にあり

文明十八年は二  
一四六年

長じ、江戸、川越、岩槻等の城はその手に成れりといふ。文明十八年、定正讒を信じてこれを殺す、扇谷家の武威これより衰へたり。

道灌はじめ文事に通ぜざりき。嘗て鷹狩に出でて雨に



大田道灌

遭ひ、路傍の家に入りて蓑を求むるに、若き女の物をも言はず、垣根の山吹を手折りて捧げたれば、道灌佛然として「吾は花を求めず」とて歸れり。これを聞きて、ある人「そ

兼明親王の詠

なきぞ悲しき

れは、七重八重花は咲けども、山吹のみの一つだになきぞ悲した。といふ古歌の意なるべし。と教へしかば、道灌いたく慚愧し、これより和歌に志して、遂に大名を博せりといふ。

干る

僧曉月の詠

満干をぞ知る

定正嘗て上總の廳南を攻めんとして、海岸に出でたり。潮干の折を計りて、軍勢を押させんとて、斥候をして視はせしが、夜半のこととて分明ならず。道灌「某物見仕るべし。」とて、馬を驅けさすと思ふ間もなく歸りて、「潮は干て候ふ、御すゝみあるべし。」といふ。如何にしてはや知りたる。と問へば、「遠くなり近くなるみの濱、千鳥、鳴く音に潮の満干をぞ知る。」と古歌にいへり、今千鳥の聲は遙に

素性法師の詠  
淵やは騒ぐ  
浅き瀬にこそ  
あだ浪は立て

康正元年は二一  
一五年

さこそ命のを  
しからめ

候ふ。と答ふ。げにもとて定正の軍勢安々と干潟を通りぬ。又ある時、軍を返して利根川にかゝれることあり。これも闇の夜にて、暗さは暗し、如何せんと、皆々躊躇せるに、道灌指圖して、「そこひなき淵やは騒ぐ、山川の浅き瀬にこそあだ浪は立て。」といふなるに、唯瀬の音高き所を渡せや。とて、無事に引上げたりといふ。

康正元年、藤澤の役に、中村重顯敵一騎討ち取り、「この武士の振舞のやさしかりしに、いざ一首手向けられよ。」と道灌に勧めぬ。道灌とりあへず、その首に對うて、

かゝる時さこそ命のをしからめ、  
かねてなき身と思ひ知らずば。

寛正元年は二一  
二〇年  
天皇は後土御門  
天皇

天覽

軒端にぞ見る

斜ならず

花や咲くらん

寛正年中、上洛せしに、天皇武藏野の景色を勅問あり、道灌

露れかぬ方もありけり、夕立の

空よりひろき武藏野の原。

と答へ奉りぬ。更に天覽に供せし歌、

わが庵は松原つゞき、海近く、

富士の高嶺を軒端小ぞ見る。

叡感斜ならずして、御製を賜ひぬ。曰く、

武藏野は高かやのみと思ひくに、

かゝる言葉の花や咲くらん。

又一歳、京にて細川勝元が短慮不成功といふ題を與へしかば、よめる、

濡れざらましを

明治卅七年四月の作

急がずむ濡れざらましを、旅人のあとより霽るゝ野路の村雨。

四 老船長

八十の大船はぎくくに

宇品みなとを離れつゝ、

大同江へぞ向ひける。

奥大将の乗りませる

八幡もひとり艦隊の

根據地さして進み入る。

海州灣頭もや深く、

海州灣頭、海軍大將東郷平八郎

海軍大將奥保鞏

八十の大船はぎくくに

宇品みなとを離れつゝ、

大同江へぞ向ひける。

奥大将の乗りませる

八幡もひとり艦隊の

根據地さして進み入る。

海州灣頭もや深く、

海軍大將東郷平八郎

海軍大將奥保鞏

八十の大船はぎくくに

宇品みなとを離れつゝ、

大同江へぞ向ひける。

奥大将の乗りませる

八幡もひとり艦隊の

根據地さして進み入る。

海州灣頭もや深く、

根據地 海州灣は朝鮮黃海道南岸にあ

陸軍大將奥保鞏

大同江へぞ向ひける

根據地

海軍大將東郷平八郎

をさ

おなじ

いさを

あはれ

あるじ

いみじ

まじる

老いたる

ネルソンは第十  
八世紀末頃の英  
國海軍提督

雨ふりそゝぐ夕まぐれ、

東郷來ぬとふれられぬ。

くがのをさ訪ふ海のをさ、

めざすはおなじ仇なれど、

いさをはわかる、過去、未來。

あはれ、この客、このあるじ、

いみじと思ふ群のうち

せつくに人もまじりたり。

船に老いたる船長は、

もと英國のうまれにて、

ネルソン夢みる人なりき。

東郷をこそ見るならめ

明治三十八年十月二十一日東郷大將ノ訓示

別れてかへる東郷は、

雨にぬれつゝトラップに

立つ船長の手をとりぬ。

言葉はなくてやゝまばし

その手放たぬ船長は

白き睫毛はぬれにけり。

あはれ、浮寝の夜の夢に、

ネルソンならで、今よりそ

東郷をこそ見るならめ。

(森鷗外)

五 聯合艦隊解散告別ノ辭

責務

緩急ニ應ズ

武力ナルモノ  
武力トイフモノ

形而上

至尊

二十閱月ノ征戰已ニ往事ト過ギ、我が聯合艦隊ハ今ヤ其ノ任務ヲ結了シテ、茲ニ解散スル事トナレリ。然レドモ我等海軍軍人ノ責務ハ決シテ輕減セルモノニアラズ。此ノ戰役ノ效果ヲ永遠ニ全クシ、尙益、國運ノ隆昌ヲ扶持センニハ、時ノ平戰ヲ問ハズ、マヅ外衝ニ立ツベキ海軍ガ常ニ其ノ武力ヲ海洋ニ保全シ、一朝緩急ニ應ズルノ覺悟アルヲ要ス。而シテ武力ナルモノハ艦船兵器等ノミニアラズシテ、之ヲ活用スル無形ノ實力ニアリ。百發百中ノ一砲能ク百發一中ノ敵砲百門ニ對抗シ得ルヲ覺ラバ、我等軍人ハ主トシテ武力ヲ形而上ニ求メザルベカラズ。我が海軍ノ勝利ヲ得タル所以モ、至尊ノ

連綿不斷ノ戰  
爭

靈德ニ由ル所多シト雖モ、抑亦平素ノ鍊磨其ノ因ヲ成シ、果チ戰役ニ結ビタルモノニシテ、若シ既往ヲ以テ將來ヲ推ス時ハ、征戰息ムト雖モ、安ンジテ休憩スベカラザルモノアルヲ覺ユ。惟フニ武人ノ一生ハ連綿不斷ノ戰爭ニシテ、時ノ平戰ニ依リ其ノ責務ニ輕重アルノ理ナシ。事アレバ武力ヲ發揮シ、事ナケレバ之ヲ修養シ、終始一貫其ノ本分ヲ盡サンノミ。過去ノ一年有半、彼風濤ト戰ヒ、寒暑ニ抗シ、屢頑敵ト對シテ、生死ノ間ニ出入セシコト、固ヨリ容易ノ業ナラザルモ、觀ズレバ是亦長期ノ一大演習ニシテ、之ニ參加シ、幾多啓發スルヲ得タル武人ノ幸福、比スルニ物ナシ。豈之ヲ征戰ノ勞苦トスル

終始一貫

ナラザルモ  
（ナラザレドモ）  
觀ズレバ

巍然タルモ  
（巍然タリトモ）

覬覦スルモ  
（覬覦スレドモ）  
英提督ネルソン  
一七九八年ない  
る河ニ佛軍ヲ、  
一八〇五年とら  
ふ。一八〇一年沖ニ  
佛西聯合軍ヲ破  
レリ  
泰山ノ安キニ  
置ク

ニ足ランヤ。苟モ武人ニシテ治平ニ儉安センカ、兵備ノ外觀巍然タルモ、宛モ砂上ノ樓閣ノ如ク、暴風一過、忽チ崩倒スルニ至ラン。洵ニ戒ムベキナリ。  
昔者神功皇后三韓ヲ征服シ給ヒシ以來、韓國ハ四百餘年我が統理ノ下ニアリシガ、一度海軍ノ頽廢スルヤ、忽チ之ヲ失ヒ、又近世ニ入り、徳川幕府治平ニ狃レテ兵備ヲ懈レバ、舉國米艦數隻ノ應對ニ苦シミ、露艦亦千島樺太ヲ覬覦スルモ、之ト抗爭スル能ハザルニ至レリ。翻ツテ之ヲ西史ニ見ルニ、十九世紀ノ初ニ當リ、ナイル及ビトラフルガ―等ニ勝チタル英國海軍ハ、祖國ヲ泰山ノ安キニ置キタルノミナラズ、爾來後進相襲イデ能ク其

國利  
國權  
般鑑

ノ武力ヲ保有シ、世運ノ進歩ニ後レザリシカバ、今ニ至ル迄、永ク其ノ國利ヲ擁護シ、國權ヲ伸張スルヲ得タリ。蓋シ此ノ如キ今古東西ノ殷鑑ハ、爲政ノ然ラシムルモノアリト雖モ、主トシテ武人ガ治ニ居テ亂ヲ忘レザルト否トニ基ヅケル自然ノ結果タラザルハナシ。我等戰後ノ軍人ハ深ク此等ノ事例ニ鑑ミ、既有ノ鍊磨ニ加フルニ戰後ノ實驗ヲ以テシ、更ニ將來ノ進歩ヲ圖リテ、時勢ノ發展ニ後レザルヲ期セザルベカラズ。若シソレ常ニ聖諭ヲ奉體シテ孜孜奮勵シ、實力ノ滿ヲ持シテ放ツベキ時節ヲ待タバ、庶幾ハクハ以テ永遠ニ護國ノ大任ヲ全クスルコトヲ得ン。神明ハ唯平素ノ鍛鍊ニ努メ、戰

ハズシテ既ニ勝テル者ニ、勝利ノ榮冠ヲ授クルト同時ニ、一勝ニ満足シテ治平ニ安ンズルモノヨリ、直ニ之ヲ褫フ、古人曰ク、勝ツテ兜ノ緒ヲ締メヨト。

### 六 國旗と軍旗

即、則  
何ぞそれ鮮明  
にして純一に  
端正にして雄  
大なる

純白の地は皓潔の性、眞紅の紋は至誠の情、白は平和沈靜を表し、赤は熱烈活動を示す。抑、列國いづれも國旗の制なきはなく、國旗は即ち邦家の歴史、國民の理想を語る。白地日章の旗は、我が國體の徽章、國民精神の記號、翻として、その風に閃くを望めば、何ぞそれ鮮明にして純一に、端正にして雄大なる。



則、即

交渉

安政元年は二五一四年、徳川家定の時

紋章  
遼遠

閉づ

晦冥なりきと

牆を高くして獨り自ら守るものは、未だ國家の標號を要せず、廣く世界に交り、列國に對するに及びて、則ち國旗なかるべからず。古わが國にはその定めなかりき。幕末の世、繁く海外と交渉するや、安政元年七月、幕府令して、日章旗を以て日本總船印として、外船に紛れざらしめ、後數年、使節を北米合衆國に遣したる時、これを國旗として用ひしめぬ。國旗の起源かくの如しといへども、紋章の由つて來れる所は遼遠なり。畏くも皇祖の御名は大日靈貴おほひなるとまた天照大神と申し奉り、歴代の天皇は天つ日嗣にまします。大神一たび磐戸を閉ぢたまへば六合晦冥なりきといふは、天日と徳を等しくしたまひし

措、置  
はた

何かあらん

旒

儀容

なり。小野妹子の使して隋に行くや、勅書に曰く、日出處の天子書を日没處の天子に致すと。日本を以て名とするわが國が國旗の紋とすべきもの、日章を措いてはた何かあらん。  
軍事に用ふるには軍旗あり、軍旗は聯隊毎に一旒あり。抑、旗幟は軍隊の主腦として、兵士を統率するが爲に缺くべからざるものなるが、古代にあつては、新田の中黒、足利の二つ引兩の如き、一門一黨の私旗に過ぎず。天皇の御旗としては錦旗ありしかど、武家跋扈の世には、御旗の風弱くして、皇軍の儀容を示す機會も少かりき。維新の際に至りて、帝威頓に揚り、爛として錦旗の輝く所、

昭代

親臨授與、舉、名譽

熾烈  
懾伏

四民これを仰ぎて、世は直に明治の昭代となれり。  
明治三年、陸軍の旗章を定められ、同七年一月廿三日、近衛歩兵第一、第二聯隊の編制成り、車駕日比谷練兵場に親臨ありて、聯隊旗授與の式を舉げたまひぬ。爾來聯隊の編制ある毎にこれを授與せらる、その式極めて嚴肅に、聯隊にては年々その當日を記念日として、軍旗祭を行ふ。

わが國民は、平時は熙々たる春日の如く穩和なれども、戦時は熾烈の光に敵國を懾伏せしむ。わが軍旗はよくこの意氣を表せり。軍旗は軍隊の精神の在る所、天皇の威靈の宿ります所なり。その儼として立つ所は大元帥

瘡るとも

硝煙彈雨

歸宿

陛下の御馬前に同じく、これを失へる軍隊は頭腦なき四肢なり。將卒すべて傷つき瘡るとも、なほ一兵の存する時、彼は死を以て軍旗護衛の任に當らざるべからず。されば硝煙彈雨に汚れ裂け、碧血迸注の痕を印し、殆ど旗竿のみ残れるが如くなりても、軍旗は更に改造せず、苦戦の記念、名譽の表彰として、永くこれを保持すといふ。

海軍にて陸軍の聯隊旗に比すべきは、それ軍艦旗か。艦尾に翻れる赤光放射の日輪が、一艦の精神の歸宿たること、また等し。海軍の旗章は明治三年に定められ、同四年に更められたり。

七 遊就館の古武器

國家の盛衰  
戰術の變遷  
壯烈の感  
懷古の情

九段坂上なる靖國神社の鳥居を入れれば、右の方立ち並ぶ木々の間に巍然たる煉瓦造の一館を見るべし、これ即ち遊就館なり。館内には古今東西の兵器を陳列して、公衆の縦覽を許す。往いてこれを見れば、國家の盛衰、戰術の變遷、眼のあたり見るが如く、壯烈の感、懷古の情交起り、俯仰低回して去ること能はず。

まづ現代の武器の精銳なるに驚きぬ。廿七八年及び卅七八年の戰役の戰利品は、一としてわが國民が忠勇報國の記念にあらざるはなし。古代に泝れば、火矢と唱へ

滋藤の弓  
征矢

前立の龍頭  
あるは

籠手

さるが中に

宋の歐陽修日本  
刀歌を作れり

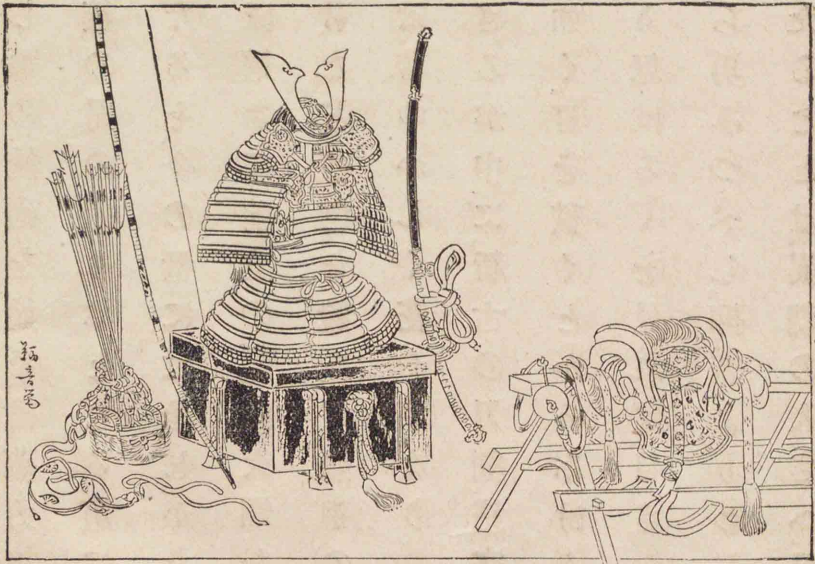
し頃の銃砲を始め、槍、薙刀、旗幟の類とりどりに多く、滋藤の弓の握りぶとなる、籐に盛りたる征矢の根の鋭げなるも、今の世には珍し。かなたの一室には、兜の星畫なほ耀きて、前立の龍頭、火焰を吐き、緋緘の鎧、あるは紫萌黄など、各色を競ひて、籠手の肱おし張りつゝ控へたるは、昔ゆかしく花やかなり。

さるが中に、新古の刀劍、鏃寒くして、冬の氷の凝りたる如く、日を貫くとかいひけん、白虹の光もかくやとばかり思はるゝを見れば、目さむるやうにて、心神おのづから勇みつべし。抑、昔よりわが國の刀劍の他國にすぐれたることは、異朝の人さへ日本刀の歌を作りて賞めた

しるし  
ハフヤリ

かしこし

重代



たへたるにてしるく、皇祖  
 皇宗の御世より御國の寶  
 として傳へ給へる神劍は  
 申すもかしこし。源氏の重  
 寶たる鬚切、膝丸、平家重代  
 の小烏丸を始として、武威  
 盛んなる世には劍を以て  
 武士の魂と貴び、之を鍛ふ  
 者はた天國、宗近の古きよ  
 り、吉光、正宗、義弘等の如き  
 名匠の、世に聞えたるもの

少からず。

然るに近き頃より戰鬪の術も歐洲の風になりにつれ  
 ば、御國の劍はやゝ用なきやうになりぬ。されど太古よ  
 りわが國の名物として、異國人にもたゞへられ、幾多の  
 由緒と歴史とを有すれば、一度これを見んものは知ら  
 ず識らずに敵愾の氣をも奮ひ起しつべし。あはれ、この  
 劍ばかりは、今より行くすゑもなほ日本男子の魂とし  
 て、われ人必ず一振は祕藏せまほしき心地するかな。

敵愾

祕藏せまほし

### 八 愛郷心

郷を思ふ心は即ち國を愛する心の根源なり。今や、封建

(關根正直)

割據 蕩然

以て

汲々リハケム

疎外

故山 眷戀

要素

ウォルタースコットはスコットランドの詩人小説家

割據地を劃して自ら守れる風、蕩然として地を掃ひ、北は樺太南半より、南は臺灣、西は朝鮮に至るまで、全國盡く統一し、相和し、相親しみ、以てこの邦土を守護せざるを得ざる時なり。徒らに一郷里、一地方の利害に汲々とし、爲に他郡縣を疎外するが如きに至りては、痛く責めざるべからず。然れども故山の風光に眷戀たる心は、即ち國家を思ふ念慮の要素なれば、必ずしも排斥すべきものに非ず。

ウォルタースコット嘗てナポレオンを傳し、評して曰く、彼の事業たる、宛も獅子の洞窟より躍り出で、奮迅馳突唯獸類を追ひて直進して、わが洞窟を忘れたる者の如し

嘗、嘗

或は

案排

盡しし熱心

滅ししこと

曾、嘗

と、これ非なり。ナポレオン嘗て曰ふ、吾常にコルシカ島の事を思うて樂しめり。帝位に即きて巴里の大都に榮華を極めし時も、時ありて生地を思ひて、全く他事を忘るゝこと屢なりき。傍人或はわが沈思するを見て、列國に對する雄大なる策略を案排すと思ひたらんが、わが夢は偶、故山を繞りしのみと。彼が一舉一動悉く佛國の爲に盡しし熱心は、一はこゝより湧き出でたらんか。その始めて中尉となりて戰場に馳せ向ひしより、人の城を屠りしこと幾何、人の國を滅ししこと幾何。而して大西洋の一孤島に空しく骨を埋むるに至るまで、時刻々佛を思ひ、佛を愛する心情は、曾て身を離るゝこ

となかまき。

少年の故山に歸省するは、後日力を國家に致さんため  
豫め心膽を鍊磨するに、與りて力なしとせず、その父母  
兄弟親戚故舊と手を握りて舊を話し、欣々として喜び、  
熙々として樂しむが如きに至りては、固よりいふを俟  
たざるなり。云ふ、「孝は百行の本」と、この語今尙動かすべ  
からざる至理を含む。願はくは幾多の名山大川を跋涉  
して故山に歸り、既に歸りて歡を父母の膝下に奉じ、某  
の丘、某の水、某の樹と、そゞろに幼年の幻影を呼び起し、  
以て釣り、以て遊び、以てわが心胸を開き、再び來りて精  
勵刻苦の前月に倍數倍せんことを。

三宅雄次郎

故舊コキウ

孝者百行之本

（孝經）

願はくは。

幼年 幻影

心胸を開く

倍數倍す

### 九 犠牲的精神

犠牲

突ツキの黙シヤウむことハ出來キ  
初ハツ本ホン氏シの人民ニ  
屋ヤ天テン民ミン

犠牲的精神とは何らの報酬利益を豫期せず、自己の財  
産、勞力、身命を差出す意氣である。人類の爲に道を説い  
て、席の暖る暇がなかつつと孔子や、突ツキの黙シヤウむことハ出來キ  
なかつつと墨子や、黎民の爲に外に在ること十三年、三つ  
び家門を過ぎて入らなかつつと禹や、こまら史上は燦爛  
する光を放つてをる人々は、皆犠牲的精神は富んで居  
る。今日の人は表面は犠牲を拂つて居るやうであるが、  
多くの裏面では利益を豫期して居る。眞の犠牲的精神  
のある人は、國の爲、家の爲、友の爲、神の爲、その他何れの

抛擲チナゲル

團體

爲、自己を抛擲し、報酬は些しも眼をつけぬのである。』人間も一人で生活して居る分は犠牲を拂ふ必要は無いが、團體を組織して居る以上は、是非その精神がなくてはならぬ。團體が大きく、それが危険に遭遇する場合は、犠牲的精神は一層深く一層強くならなければならぬ。我が日本はもと一家を基礎として造り上げらるる。我が國家で、團體としては最も堅く最も強いものである。我が國民の有する犠牲的精神は、頗る鞏固であるので、建國以來數千年の今日に至るまで、曾て國家の體面を汚しることおない。勿論日本が島國で、他國の襲撃を免き易かつたことも事實ではあるが、帝國隆盛の眞の

基礎

原因は國民の犠牲的精神にあつたのである。

今日吾々は祖先の拂つた尊い犠牲の爲に、この強國の列に入つた日本帝國の國民とることお出来るのであるが、他面から見ればこきは非常な重い負擔で、前よりも大きな危険に對して面を向けることとなつたのである。在來の日本を對外關係が少く、古くは神功皇后の三韓征伐、元寇、豊臣秀吉の朝鮮征伐、近くは清國及び露國との交戦位のもので、他は國內の小競合に過ぎなかつた。然るに今日は位置を進めて世界に對して強國の地位を保つこととなつたから、犠牲の形が從來よりも大きくなつた譯である。随つて犠牲的精神も一層大き

くならねばならぬ。

(志田鉀太郎)

### 一〇 志士の最期

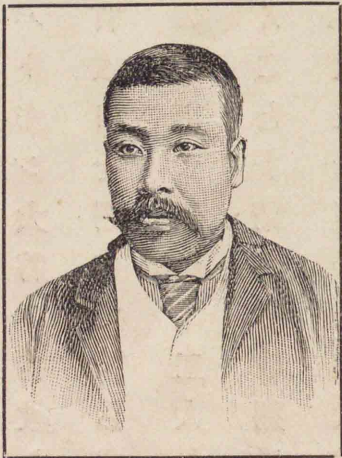
屋根なき粗造の圍の中、白木の机を前にして、怪しき腰掛臺に坐せる三人の露國士官、これぞこの日の裁判官として、その左右に控へたる二人の士官は、檢察官と被告の辯護人となり。傍聽せる者は、見渡す限り唯二人のみ。一人は獨逸新聞記者として、他は余なり、被告を呼び出すべしとの穩として、噎トガきたる聲は、裁判長たる大佐の口より出でぬ。同時は支那人は扮装せる二人の日本人現きより。本名は名のらず、唯その階級を告げ、續い

そが

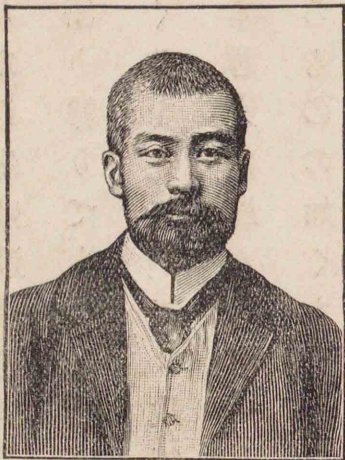
被告  
辯護人

扮装

審問



横川省三



沖積介

て重要な審問に答へたり。彼等は隠すことなく一切の事實を告白せり。彼等は東京より來る四人の學生と共に北京を立出でたり。その目的は爆裂薬にて鐵道線路を破壊するにありき。彼等は徒歩にて蒙古の野を横ぎり、漸くしてチハルに達しぬ。さきどコサク兵に取押へられてその目的を達し得ず、四



視線を注ぐ

人の學生は逃げ延びると、二人の小柄なる黄色人は語り終りて、少しも己の勇氣を誇る色なし。一人は正しく前を見て、絶えず裁判長を視線を注ぎまども、聊かも尊大の風なし。猶一人は俯きて足下を眺め、沈思を耽るものの如くなりき。二人の態度は一座の同情を惹き、一瞬の後、判官は軍法會議を列する士官等と共に、クロバトキン大將を特赦を願ひ出づるまで至まり。檢察官は口を閉ちて語らず、辯護の任を當まる士官は、法廷の仁慈を訴へて二人を戦争に於ける捕虜とし取扱はんことを請へり。裁判長は被告に向ひて問ひぬ、更言ふことなきかと。二人曰く「無し」と。法廷は休憩せり。五分

仁慈に訴ふ

膚に粟を生ず

の後再び開廷し、豫期の如く死刑の宣告は下りぬ。二人の日本人は毫も戦慄することなく、この宣告を領し、而かも唇頭聊か微笑の浮ぶを見たり。軍服を着換へざるかと問われし時、その要なしと答へぬ。この崇嚴なる數分間、於ける余は總身水を浴びらん如く、戦慄膚に粟を生ぜり。宣告文と特赦請願の電文とは同時に遼陽なるクロバトキン大將を發せられぬ。一時間を経て返電あり、曰く「宣告文の如く死刑を處すべし」と。この時打ち出す十二の銃彈は彼らの胸部を貫けり。三十七年五月廿五日の露國新聞は、日本士官の死刑と題してこの通信を載せたり。二人の日本人とは誰ぞ、志

士沖禎介、横川省三なり。

(忠烈美譚)

一一 農夫の歌

うもれよ  
ゆけ  
隠れよ

朝あふさ々々びこ々々あり、  
朝あわれらととももあり、  
うもれよ眠ゆけと夢、  
隠れよ、さらば、小夜嵐。  
もろ羽うちちふるる鶏ひ、  
のんどの笛ふを吹きならし、  
けふるる命いのちのた々々ひひの

よそほひせよ  
準備せよ

いでよ

ゆへ  
とれ

やれりオと使へ

血しほ  
いかづち

よそほひせよと叫ぶかを。

野のいいでよ、野のいいでよ、  
稻いの穂ほハハ黄わみみのりりり、  
草鞋くとくゆへ、鎌かももとれ、  
風かズズくく馬うももやれ。

血ちししほほハハ草くズズ流ながさねど、  
鋤あふりて、いいづちに  
天あの嵐あにた々々ひひし  
わあたた々々ひひの跡やこ。

見よ

今し。

植う。

刈りほせ

見よ、日の高き青空の  
はてよりはてを弓と志て、  
今し父の矢、母の矢の  
光をふらす眞晝中。

共よ來て蒔き、來て植ゑし、  
田のみに秋の風おちて、  
野邊の琥珀（琥珀）をならすか駈、  
刈りほせ、刈りほせ、稻の穂を。

（藤村詩集による）

一二 イギリス人とフランス人

重んずるの厚  
小天地に跼蹐（せす）  
せす  
有つては  
拔正（ス）

約言（リ）  
約言（リ）  
約言（リ）

惜しげ

英人が家庭を重んずるの厚き、世界無比の稱あり。彼等  
は元來活動の氣に富み、本國の小天地に跼蹐せずして、  
好んで天下到る處に移住を企つ。その移住するや、家族  
舉つて郷國を出で、萬里の外に英國流の家庭を樹て、小  
英國を植ゑ付くること、これ英人の尤も得意とする所  
なり。

佛人ブーミー嘗て英人が植民力に富める狀を寫して、  
同胞國民を警めたり。その一節を約言すれば、曰く、英人  
の加奈太に赴くや、初は都會の近郊に土地を求めて耕  
すと雖も、暫くにして惜しげもなく之を賣拂ひ、次第に  
深く僻遠の地に入りて、荒蕪を拓くを樂しめり。彼等は



汲々たり  
一生努力

設

名望

飛躍

斗筲の吏  
薄給の吏

の前途を定め、その子弟を作成するに汲々たるなり。英人は全く之に異なり。蓋し彼等の子弟を教ふる所以は、實にその自助の道を授くるに在り。その子弟は七八歳の頃より、早くも父母の膝下を離れ、寄宿舎の設ある學校に入りて、自營の風を養はしめらる。自助の學は自立の人を作る。英人にして身長子に生れ、その父母の遺産と名望とを継ぎ、その郷土に棲息する者の外は、進みて海外に飛躍して、敢へてその小天地に跼蹐せざる者、實に自立の精神の之を然らしむるなり。彼等の多くが斗筲の吏たるに甘んぜず、却つて難に耐へ險を冒して、以て鉅萬の富を致さんことを欲するは、亦之が爲なり。

革新

管絃  
賭弓  
蹴鞠  
流鏑馬  
笠懸  
犬追物  
神往  
告朔の餼羊  
オウチ  
カキ

一三 海上の壯遊

明治の革新は、わが國の一切の事情に一大横線を劃せる觀あり、遊技に於てもその數に漏れず。從來行はれたりしもの漸く世に遠ざかると共に、未だ曾て見ざりしもの別にその姿を現し來れり。遙に上代に浜れば、公卿には管絃あり、賭弓あり、蹴鞠あり、武家には流鏑馬あり、笠懸あり、犬追物ありき。或は典雅、或は精悍、古書を繙き古畫を擴げてその昔を想へば、神往の感ありといへども、その技は今殆ど流傳せず、僅に残存するも、告朔の餼羊たるのみ。近くは楊弓の如き、投扇輿の如き、また漸く

海落 オチル

その跡を絶ち、香道、茶道の類も、或は泯び、或は衰ふ。淪落相継ぎ、前代の遊技にして今日まで行はるゝは、圍碁、將棋、謠曲等に過ぎず。これに代つて明治に至つて傳れるものには、野球、庭球等の球技あり、端艇競漕あり、自轉車あり、銃獵あり、數へて十指に餘るといへども、猶廢絶せる遊技の空位は存す。新に起してその座を占めしむべきもの、ヨチングの如き好技は稀なるべし。遊樂の類世に多しといへども、この遊技の如く優美にして壯快に、社交的にして且超世的なるもの又他にありや。この技や、高尚にして多趣味に、社會の各部に接觸し、遊技の徳を圓滿に具有す、以て娛樂の王と稱すべし。

社交的 社会的  
超世的 超世的  
幸福 幸福  
脱 脱  
キ キ  
オル オル

貴族的

その缺點を求むれば、貴族的にして民庶の與し易からざるにあり。されど小形のヨットを作るもの、漸次その數を加ふるに至りては、もはや貴紳豪富の娛樂たるに止らずして、通俗卑近なる平民の遊技たるなり。げにヤカルショット城附近の海上、これらの小帆船、所謂海燕クイーンが群翔する碧瀾雪帆の光景は、人をして天下の美觀と激賞せしむるもの、これ英國の實狀なるに徴すれば、この遊技の貴族的なりといふ非難も、既に輕減せられざるなり。

非難

陸上の家屋は動かすべからず、善美を盡せる別莊も、窓外の青山白水は何時も同じ青山白水にして、四季の變

横井也、尾張の俳人  
あらば知らず

由、據

化を除きては、一丘一川も移し難し。されば也有が平素好景に面せる窓を閉ぢたりといふ用意あらば知らず、世人の通習は、絶勝の地を占めても、三日にして慣れ、五日にして厭き、やがては門を閉ぢて顧みず、資財饒なるものは別に幾箇所にも第宅を構ふるに至る。かく陸上の小天地に跼蹐するのみにして、海岸線の長き國に住みながら、任意に移動して變化無盡の景色に接すべき家屋を設くるものなきは、愚ならずや。思ふにこれ敢て爲さざるにあらず、未だ水上生活の快味を解せざるに由れり。試に想へ、百噸乃至數百噸の快船を己の設計に據りて建造し、その船室を己の趣味に従ひて裝飾し、

遠くも去り

豈啻に愉快とのみいはんや

家族朋友と共にこれに乗じて、飄々として岸を離れん様を、或は海上遠くも去り、或は陸地近くも來り、北は峭壁巉巖の凄寥なるところ、南は沙濱松洲の明媚なるところ、興の行くに任せて船を繋ぎ、夏に、冬に、花に、月に、賞覽を縦にせば、只この一隻舟によりて享樂すべき愉快の情、果して幾何ぞ。豈啻に愉快とのみいはんや、荒潮に洗はるゝ旭日、八千浪の果に沈む弦月、或は高華、或は清冷、これらの景色は、また驕惰の人、煩悶の人をして自然の大いなる教訓を味はしむべし。若しそれヨットに乗り、萬里の波を踏んで世界を周遊せば、智を擴げ、膽を壯にし、感興を新にすること實に鮮少

胸襟を披く  
胸中ヲセシム

貢獻リニツグ

本領

決して輕視す  
べからず

にあらじ。船中に招致せる學者才人等と、胸襟を披いて相語り相評して、世界の價值あるものを吸収し消化せば、則ち直接には興味深く一切の事物に接觸し、間接には學藝の上に何物をか貢獻せん。但しこれ等は、この遊技の副産物の如きもの、その本領は寧ろ八方の風を驅使して、五大洋をわが庭とするにありといへども、副産物も決して輕視すべからず。公務に服する軍艦にも、あらず、實利を主とする商船にもあらざるに、英國政府がこれに對して全く免稅し、軍艦あらざる時は、公用浮標に繋纜し得べき權利を與へ、又軍艦が入港し來れる外國のヨットに時辰儀の差を正し教ふるなどの便宜を與

親炙  
リ親シクシム

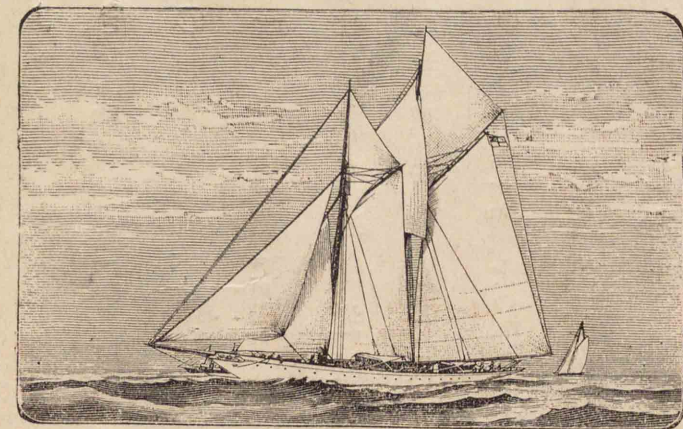
ふるも、一にこの遊技の有益にして、その乗者の品格高きが爲なるべし。遊戯といへば遊戯なれども、他の遊技の如く不純不美なるものにあらず。日月星辰、雨露霜雪、一切の自然に親炙し、大海の懷に抱かれ、長風の手に擁せられて遊ぶ遊技なり。ブラッセイ卿がヨットに乗じて一八五四年より一八九三年までの間に、二十二萬八千六百八十二哩を航走したるが如き、この遊技の中には、無經驗者の想到せざる幽趣妙處の存するが爲なることを思はしむ。

ヨツチングは多趣有益なることかくの如く、隨うて歐米諸國には大に行はる。獨逸皇帝がメテオルに、英國先



皇儲

帝が皇儲たりし時ブリタニヤに乗御し、親しく操縦の  
勞を執り給ひしは、人のよく知るところなり。その競漕



三第ルオテメ艇乗の帝皇逸獨

に至つてもまた甚だ盛んに、英  
國はいふに及ばず、米獨等の諸  
國もこれに熱中し、小競漕は各  
地に行はれ、大競漕は國と國と  
の間に起る。蓋しヨット競漕の妙  
味は、その構造に大改良を施し、  
その設計に新機軸を出して、以  
て知識と伎倆とを闘はしむる  
ところに存し、他の腕力、脚力等

新機軸

伎倆、遊技

選を異にす

驚くに堪へたり

によりてのみ勝負を決する競技とは頗る選を異にす。』  
英國におけるヨットの數は純帆船二千二百餘隻にして、  
計六萬四千餘噸、汽機を具せるもの七百隻にして、計六  
萬八千餘噸、即ち總計十三萬餘噸にして、猶小ヨット三千  
隻はこの計算中に含まずといへば、その盛況驚くに堪  
へたり。流石に海上獨尊の島帝國なるかな。顧みてわが  
國の事を思ふに、古代の遊技は復興せずともあれ、この  
海上の壯遊は正に振起すべきものにあらざるや、東洋の  
英國と稱せらるゝ帝國の位置よりしても特に然るべ  
きを見る。猪牙、家根船、又は屋形船、御座船の時代は過ぎ  
たり、横濱より伊豆の大島までの逆風競漕などの記事

が新聞紙に見はるべきは、あゝ何年の後ぞや。

(蝸牛庵夜譚による)

### 一四 高田屋嘉兵衛

經綸  
鵬翼を張る

ベテロ大帝の經綸によりて、ロシヤは世界の強國となりぬ。子孫その志を繼いで鵬翼を張らんとし、注視は遠くアジアの東北端に及び、堪察加より下つてわが北邊を覗へり。幕府意漸く安からず、吏を派して蝦夷を巡察せしめ、北門警備の第一着として、擇捉の拓殖を企つ。されど擇捉海峡は潮流險惡、纔に輕舟を通ずれども、時に覆没の難を免れず、大船の渡航に至りては甚だ危し。よりて幕府は令を發して、試航の船頭を募れり、これに應

北門警備  
拓殖

寛政十一年は二  
四五年、徳川  
家齊の時

緒に就く

じて起ちしは高田屋嘉兵衛なり。

嘉兵衛は淡路の人、兵庫に來りて回漕を業とし、屢松前に航す。寛政十一年、擇捉試航の命を受け、船を驥して國後にあり、日々海岸の高丘に登りて潮流の方向を察し、時に小舟を泛べてその緩急を測り、終に安全なる航路を得たり。海路通じて拓殖緒に就き、荒殘の孤嶋、漁場開け、生計進み、夷民悦んで業に従ふ。嘉兵衛も官船を領してこの地に往來し、北海の津々浦々その山高の船標を見ざるなきに至れり。

その後、ロシヤ使を派して通商を請へども、わが邦舊習を守りて求に應ぜず。ロシヤ人これを銜みて北邊に寇

文化八年は二四  
七一年、徳川家  
齊の時

し、米鹽を掠め、家屋を焼き、又住民を捕ふ。邦人その暴虐を憤りて、敵愾の念うた、熾んなりき。時に文化八年、千島近海測量の爲に露艦の國後に來れるあり、わが兵艦長ゴロブニン以下數人を拘留す。副長リコールド艦首を回して去りぬ。

その翌年、嘉兵衛は、捕魚を船に積み、擇捉より函館に向へるに、一隻の露艦忽然として途を遮り、端艇を下して來り襲ふ。船中徒らに狼狽し、嘉兵衛獨り腕を扼すれども、如何ともする能はず、意を決して敵艦に行く。艦中にはリコールドあり、ゴロブニン等の安危を虞り、救助の策を講ぜんとして、この舉に出でしなり。嘉兵衛敵中

來り襲ふ  
腕を扼す

神色  
無辜

贈、送

葛藤

風物

節を屈す

捕へ來る

に入れども神色自若、無辜の水夫を免して、おのれ一人を捕へんことを請ふ。リコールド一見して敬畏の色あり。されど水夫のうち四人を選んでこれに伴はしめ、携へて堪察加に向つて去る。去るに臨みて、嘉兵衛書をその弟に贈りて曰く、天涯の俘虜なほ報國の微志を存す。願はくは一身を擲ちて兩國の葛藤を解き、北邊をして永く無異ならしめんと。朔風雪を捲いて風物悽慘、嘉兵衛は遠く海外に捕はれてなほ節を屈せず、刻苦してロシヤ語を學べり。漸く用語の自由を得て、則ちリコールドに説いて曰く、君が余を捕へ來れるも、日露兩國の和好を全くせんが爲なら

恥

ん。余が恥を忍んでこゝに留れるも、その意は一なり。然れどもわが國人がゴロブニン等<sup>ゴロブニン</sup>を捕へたるは、ロシア人の劫略<sup>キョウラク</sup>を憤れるが爲のみ。貴國まづ罪あり」と。リコールド曰く、かの劫略は一人の暴行にして、わが政府は與り知らず、これによつて日本の怒を買へるは冤なりといふべし。これを和解する策如何と。嘉兵衛膝を進めて曰く、果して然らば、貴國は書を裁して他意なきを辨ずべし。事情もし明かならば、わが國また怨を釋かん。余一個の民といへども、應分の力を盡さざらんや」と、誠意面に現る。リコールド痛くこれに感じ、互に心腹を傾けて、邦家の爲に奔走すべきを約せり。

與り知る

應分

荏苒  
得策

異郷にありて歳は改りぬ。水夫の二人は既に死し、嘉兵衛また病あり。リコールドも荏苒日<sup>じんぜん</sup>を過すを得策にあらずとし、官書の來るを待たず、春風海を渡つて堅氷の解くると共に、嘉兵衛等を伴ひて國後<sup>こくご</sup>に來りぬ。船灣に入るや、生き残れる水夫二人を使として上陸せしめ、これを脅して曰く、もし歸り報ずることなくば、再び汝等の主人を捕へ去り、また武備を整へて來り攻むべし」と。嘉兵衛小筐と佩刀とを水夫に託して家人に寄せ、これを送つて後、毅然として容を改めてリコールドに對つて曰く、卑賤の匹夫いかんぞ重任を負ふべき。君今に至つて余を信ぜず、狐疑は大事を妨ぐ。再び余を捕へ還ら

生き残る

歸り報ず

捕へ去る  
來り攻む

送

狐疑  
捕へ還る

調停

周旋

握手

んとすとも、微軀また動かすべからず。余既に死を決して筐中の遺髪を送る、一刀こゝにあり」と。リコールド色を失ひて前非を謝し、直に上陸して調停に従はしむ。嘉兵衛曰く、「功もし成らざば、余も何の面目ありてか生を貪らんと。かくして嘉兵衛は周旋甚だ力め、遂にゴロブニン等を釋放し、兩國をして舊怨を棄てて握手せしむるに至れり。

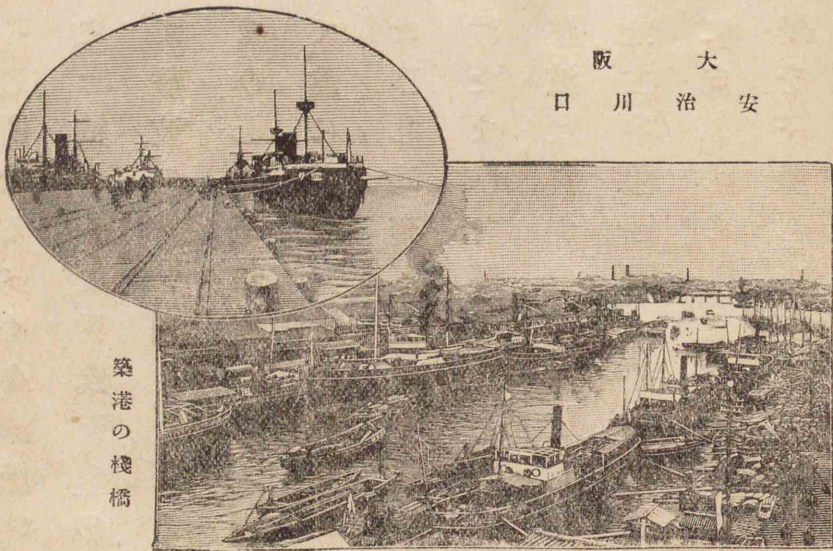
一五 大阪

栽(裁、載、載、載)

大阪は淀川の河口にあり、もと難波といへり。その邊は廣大なる一面の平野にして、綿、菜種の栽培に適し、春日

布きつめたらんが如し

堆積



築港の棧橋

菜花盛んなる頃は、見渡すかぎり黄金を布きつめたらんが如し。この平野は元來淀川、大和川の流域に當り、これより流れ下る泥砂の堆積して成れるものにして、江流尙絶ゆることなぐ土壤を送り來れば、古來地勢の變遷頗る著し。されば今船場と稱して最も殷賑なる地は、昔船舶の碇泊

史を按ず

せし所なるべく、今も續いて新田の増加するを見る。史を按ずるに、神武天皇の東征したまふや、舟師を率ゐて難波の崎に到り、これより流を浜りて畿内に入りたまひしが、征戦利あらず、更に軍を還し、海路紀州を廻りて、遂に大和に入りたまへり。天皇はじめ難波に着きたまひし時、奔潮ただ急なり、因りてその地を浪速と名づけたまひた、難波はこれを訛れるなり。

畿甸

難波は畿甸の咽喉にして西國往還の關門なり。されば上古、中國、四國、九州に通ふ船はいふに及ばず、朝鮮、支那に向ふものもまづこゝに錨を抜きたり。神功皇后が朝鮮を征服したまひし後、外國の朝貢、文物の傳來數なる

遣唐使

鴻臚館

に至りしかば、仁徳天皇は都を高津に遷したまへり。推古天皇の朝に使節の交換ありしよりこのかた、支那との交通頓に頻繁となり、大化の改新を斷行したまひし孝徳天皇は、また都を長柄の豊崎に奠めたまへり。帝都となりしは、この二回に過ぎざれども、遣唐使の出入、外客の來朝はいづれもこの津頭よりし、陸には鴻臚館の設あり、海には帆檣常に林立したりき。

杜絶

旅す

その後宇多天皇の朝に遣唐使を廢せられしより、外國交通は杜絶し、偶、京人が住吉、天王寺に詣で、潮湯に浴せんとてこゝに來り、もしくは西南の地に旅するもの立寄るはありしかど、難波の繁昌はまた舊の如くなる

明應元年は二一  
五二年

堀、堀  
堀、堀

こと能はざりき。足利氏の時、明との交通新に開かれしが、當時貨物集散の中心は堺の津にして、難波は與らず。明應の頃一向宗の僧蓮如が生玉に石山本願寺を建てしより、大阪復興の運は萌せるなり。  
豊臣秀吉本願寺を修築して金城鐵壁を構ふ、即ち大阪城にして、併せてまた市街を起し、伏見、堺の町人をこゝに移せり。當時、安井道頓洲渚を埋め、溝渠を掘りて、土木の功大いなり、道頓堀の名これより出でたり。徳川氏の世の初、大阪城代松平忠明また努力して市政の改善に従事し、これより繁榮年々加り、廻船漕運の便は天下の富を湊め、豪商富估軒を列ねて、實にこの地はわが國に

標準

麾下

疏通

於ける經濟の中心となりぬ。俗に大阪は日本の臺所といひ、諸侯は藏屋敷を設け、藩國に産する米穀、その他の物産を送り來りて、こゝに販賣せしむ。市場の最も盛んなるは堂島の米市にして、その相場を標準として全國の米價は定まる。米市は、秀吉の頃、與右衛門といふもの、淀の長堤を修築して巨利を博せしより、淀屋と稱し、商業に従事して、豊臣氏の麾下に糧米を給し、又門前に市を立てて廣く米穀を賣買せしに始りぬといふ。  
この地東方一帯は丘陵をなし、漸次西に向ひて低下し、淀川は市中を貫流して海に注ぐ。市街はこれを引きて水流縦横に疏通し、數百の橋梁參差として横たはり、物

貨の運搬極めて敏活なり。現今は鐵道またこの地を中  
心として四通八達し、市民が積年の希望たる築港も、ま  
た遠からずして完成せんとす。

一六 木曾の奇勝

玉兔

中央線のいまだ開通せざりし時の事なり。歩み疲れて  
須原驛に着きしは、夜の九時頃なりしが、山中の荒驛は  
早くも更けて、冷露聲なく、玉兔徐かに轉ずる良夜も、更  
に賞する人なく、旅亭は既に戸を閉ぢたるもの多かり  
き。わが宿りたる室は恰も木曾川の流に沿ひて、水聲近  
く枕に通へり。

静けさ  
寂しさ

翌朝、名物の花漬一箱二箱を買ひて、旅亭を出づ。旭未だ  
昇らず、曉露の繁きこと雨の如し。霧は次第に東山より  
霽れて、未だ寢覺に到らざるに、日影は早くも對岸の山  
の半腹に及びぬ。空氣は極めて清澄にして、その中に言  
ふべからざる秋の静けさと淋しさを交へたり。木曾  
川の溪流よりは朝の水煙盛んに升りて、水聲の潔きこ  
と人世のものとしも覺えむ。

碧に  
奇に

寢覺の床の名は、かねて耳に熟せるところ、路傍にその  
標柱の立てるを認めて、直に路をもとめてこれに赴く。  
臨川寺の庭に踞して、獨り徐かに下瞰するに、水はあく  
まで碧に、岩はあくまで奇に、その間に松面白く點綴せ



添、沿、副  
縁起

られたるは、更に畫圖の如き趣を添へたり。雖僧あり、寺の縁起を説けるが、溪に下るべき路あるを指點して、吾を案内せんといふ。乃ち共に細徑を竹林の中に求め、石



寢 覺 の 床

に縫り岩に凭りて、辛うじて溪に達す。溪は急流危巖相交れる勝地にして、岩石の奇なるものを屏風岩、硯岩、烏

沿、添、副

踵を接す

帽子岩、蓮華岩、釣舟岩等とす。ぎの水の來るや、沈々として聲無く、その色の深碧にして急駛せる、そゞろにわが心を惹きぬ。岩石の中央に一小祠あり、稱して浦島太郎が綸を垂れたる古跡といふ。岩上に踞して四顧すると多時、輿の盡くるに及びて、もと來し路を求め、再び木曾川の流に沿ふ。上松驛は、木曾山中、福島に次げる邑にして、その繁華は中津川以北未だ曾て見ざるところ、街衢また整頓せり。駒嶽に登る人は多くこの地よりするを以て、夏時は白衣の行者踵を接し、旅亭は客を以て填ると聞く。上松を過ぐれば、一度離れし木曾川は、再び來りて路傍

激湍

を洗ひ、激湍水珠を飛し、奇岩水中に横たはる。兩岸の山また漸く迫り、棧に至りて更に有名なる一大奇溪を現出し來る。

なりきと聞く

慶安元年は二三

〇八年、徳川家

光の時

危さ

盛りて、危さもやゝ薄らぎぬといふ。されど、あけはしや、命をからむ蔦かづらと芭蕉がよみたるを思へば、尙意を用ひずば、千尋の深谷に墜つべき虞もありしが如くなるを、寛保元年、更に道路を修築してより、古棧跡なくして、溪またかくの如く淺く平かになりたること、吾は

寛保元年は二四〇一年、徳川吉宗の時

副、添、沿

悪しと

古今の變遷に驚かざる能はず。

吾は棧の名の甚だ高きに似ず、その實のこれに副はざるを覚えぬ。されど風景としてはさして悪しといふにてもなく、見ん人の心々にて、寢覺などよりもすぐれたりと思ふもあるなるべし。溪は長さ二町ばかり、上流より弧形を爲して流れ來りたるが、その弓の中央に當りたらんともおぼしきあたり、最も深潭の趣に富み、溪樹の蒼鬱としてその上に生ひ茂れる、また捨つべきものとしも覺えず。その深潭に臨みて瀟洒なる一軒の茶亭あり。名物あんころ餅は旅客の大方は憩ひて味ふところ、又紅葉の頃になれば、來り遊びてこの亭に一日を暮

深潭  
瀟洒

すもの甚だ多しといふ。

田山應舉  
章枕による

一七 秋の歌

みこたせば花も紅葉もなかりきり

ゆふぐれ

浦のとまやの秋のゆふぐれ。

藤原定家

天の原ふきすさびたる秋風に

たゆたふ

走る雲あれば、たゆたふ雲あり。

稻取魚彦

ものゝふの苔むすかむね年ぬりて、

秋風さむし桔梗が原。

加藤美樹

夕風よきよる渚のさゝら波、

水にも秋のこゑはありけり。

加藤千隆

見さく

おひ征矢を手ばさこもちて見さくれば、

弓張月よ雁なきとたる。

久米幹文

一八 圓山應舉

字

圓山應舉字は仲選、通稱を主水といへり、丹波國穴太村の人なり。百姓の家に生れたるが、耕耘を好まず、田に出でて竹を以て地上に畫く。父母これを村内の金剛寺に遣りて僧とせんとせしが、それにも従はずして京に出で、石田幽汀を師として畫を學ぶ。幽汀は狩野派の繪師なり、應舉は技術の進むに隨ひて、その教に満足せず、洛中、洛外の大寺を巡りて、その所藏の名品を觀、元、明の

光琳風は元祿の頃尾形光琳の起せるもの

模擬 津梁

古畫によりて益を得ること多く、又光琳風の筆意をも交へ、時には西洋畫の長所をも考へ、畫道の本意は古人の筆蹟を模擬するにあらず、これを津梁として、みづから自然に接するにあることを悟りて、遂に寫生の一派を立てたり。

試みる、(試む) 覇權を握る とほり

實物の寫生は、今日より見れば普通のことにして、ことさらに賞むべきほどにもあらずといへども、百五十年ばかりの昔にこれを試みたるは、非常の見識と膽力とを要することなりき。その頃、狩野氏畫界の覇權を握りて恣に子弟を束縛し、子弟は師家の手本のとほりに學ぶのみにして、その間に己の工夫を加ふれば、却つて破

文人畫は池大雅、與謝蕪村等の唱道によりて大に行はれた

仰ぐ

絶えす

形似の末



山應舉

門の辱を受くること多し。別に文人畫の一派も行はれたれども、支那の古畫に泥みて、うの外に出づる能はず。この時に當りて、應舉が時習を脱して直に自然を師としたるは、非常の英斷にして、その風を仰ぐもの。今に至りて絶えざるも、當然のことなり。應舉の寫生は形似の末にのみ苦心するにあらず、力めて鳥獸蟲魚が活動の様を現さんとす。轉

浮きつ沈みつ

餌

躍る

目のあたり

がり合ひて遊ぶ狗の兒、浮きつ沈みつ泳ぎ回る鯉の群、  
 雞をつれて餌をあさる雌雄の雞など特に巧にして、生  
 氣溢れて絹紙の外に躍る。その寫生に熱心なりしこと  
 については逸話あり。嘗て臥猪イノシシを畫かんとせしが、目の  
 あたりこれを見たることなし、薪賣る老婆に尋ねしに、  
 洛北八瀬邊の山中には稀に見ることありといふ。若し  
 さる折もあらば早く告ぐべしと頼み置きしに、ある日  
 老婆のしらせあり。急ぎかけつけしに、果して藪の中に  
 一疋の猪イノシシ臥し居たり。喜びてこれを寫し、清書して鞍馬  
 より出づる老翁に示す。老翁一見して曰く、「これ臥猪に  
 あらず、病猪なり」と。應舉驚き尋ねて、乃ち彼此の差別を

猪

會得

衝立

造化の巧を奪ふ

會得す。老婆も亦來りて、「かの猪は翌朝死し居たり。」とい  
 へり。よりて圖を改めて、重ねて老翁の來れる時示せる  
 に、手を拍つて、「これなり」と、この猪は活きたり。」と叫び  
 ぬといふ。そのほか、祇園社の衝立ウチカケに雞を畫き、その羽毛  
 と地上の草と季節の相違へることを、見物の百姓に笑  
 はれて訂正したりといふ話なども傳れり。眞偽如何は  
 知らざれども、應舉が寫生に力を盡したることは疑ふ  
 べからず。  
 應舉の畫ける人物は未だ明畫の舊習を脱すること能  
 はず。されど動植物を寫して生動の妙を窮めたるは勿  
 論、山水もまた筆を揮つて造化の巧を奪へり。その住所

隨うて

纖弱

走らせ

覺えず

は京都なり、その郷里は丹波の龜岡に接して、また京都に遠からず。元來京畿の地は山水溫雅にして險峻ならず、隨うてこれに慣れたる人の手に成りたる畫は、優美の態あれど雄大の氣なしと評せらるゝこと、理なきにあらず。四圍の感化は已むを得ざることなるが、應舉はなほ勉めて纖弱の弊を避けんとしゝり。京に近くしては保津川、絶勝の名高く、怪巖相交り、急流矢の如し。應舉その景を愛し、水石の間を徘徊して筆を走らせ、遂に一畫を成せるもの今存す。古松の蟠り、奔湍の迸る様、見るもの覺えず快と呼ぶべし。三井寺圓滿院の瀑布の大幅は、その門主が庭上の巨松に懸けたるものにして、こ



(卷六 八二三)

川津保筆舉應

延いて  
慨きても餘あり

蕭條  
風情

爍く

れを觀るもの、腋下忽ち清風を生ずべし。穴太の金剛寺の襖に畫ける波濤は、砂を噛み空を捲きて、大地も震ふ感あり。應舉の大作少からず、いづれもよく活動の狀を寫したるものなること、これらによりて推すべし。たゞ末派の人が小景を寫して纖弱に流れ、その弊は延いて應舉の名を傷つくること、慨きても餘あり。

一九 鎮守の森

滿目蕭條として、田も畠も霜枯の風情見るかげもなき間に、一むらこんもりとして緑鬱葱たるものも、鎮守の森なり。金も石も爍けんばかりの夏の眞晝中に、一陣の

注連繩

涼風殿角より起りて、社前の注連繩さらくと鳴れば、こゝは子守、田夫等の安樂世界となりて、拜殿に晝寐の夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿紅を染めて夕日の色もまばゆし。花朧なる曉、月明き夜、松杉暗くして、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣獨りこゝに饒にして、何事のおはしますかは知らねども、神しく覺ゆるなり。

花信

瑞籬神さぶ

涼を趁ふ

日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎮守の森は舞蹈場と化するなり。祠頭の旗幟翩翩として風に靡く時、滿村の老幼織るが如く、鎮守の祭禮は、一

氏族部民

歳中復と得がたき歡樂たるなり。年豊なれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望を聚め、一郷の中心として、神聖なるるかも面白き所たるなり。かゝる鎮守の森にいます神は、多くはその土地、その土着の民と何等かの關係あり、遡つて之を考ふれば、氏族部民がその祖先を祀りたるものも少からず。諸國に鎮座したまふ神社は、畢竟鎮守の森の大いなるものなり。鹿島、香取の神宮は、經津主神、武甕槌神の子孫が創めたる所にして、宇都宮二荒神社は毛野君の一族がその祖先を祀れる所なるべし。その一層大いなるものには、出雲大社あり、その最も大いにして日本の鎮守たるもの



には、五十鈴川の上に宮柱太しく高き伊勢大神宮もあ  
 らせ給ふなり。  
 これを小にしては一村の中心にして、これを大にすれ  
 ば帝國の中心なり。祖先の神靈、前賢の精魂は長へに鎮  
 守の社中に留りて、子孫後人の精神に通ひ、彼等をして  
 奮勵自進せしむべし。天佑神助の信仰は勇氣鼓舞の最  
 良法なり、あかも信仰とは權道にあらず、方便にあらず  
 して、直に神に接し靈に感ずる唯一の法なり。  
 祖先崇拜なるかな。これ獨り原始の觀念のみにあらず、  
 祖先の功勳は後人奮勵の料たり、子孫の名譽心を發揮  
 すべき興奮劑なり。但その崇拜をして保守的たらしむ

權道

祖先崇拜  
原始の觀念

興奮劑

自覺的

こゝに於てか。

る勿れ、回顧的たらしむる勿れ、進歩的たらしめざるべ  
 からず、自覺的たらしめざるべからず。  
 こゝに於てか鎮守の森をして、一層、一村一郷の中心た  
 るの實あらしむべきなり。森をして神さび、靈の窟宅た  
 るに適せしむべきなり。これが爲には樹の苗を植ゑ、草  
 萊を去り、祠宇を修め、園池を美にすべし。一村一郷の崇  
 敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき  
 田夫にも美の觀念を與ふる所、村人の誇とする所、他郷  
 に在りても猶戀々の思あるべき所たらしむべし。小學  
 兒童の運動會も之を中心としてこの附近に行はしむ  
 べし、小やかなる村落圖書館の如きもこのほとりに設

美の觀念

けらるれば、尤も妙なるべし。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得る所極めて大いなるものあらん。

（笹川臨風）

二〇 栗

野人  
がさくくと  
朴訥

青々と

栗は野人なり。膚も葉もがさくとして、いかにも朴訥なり。その實もいゝ巧言令色を嫌へばとて、毬の逆茂木、厚革の鎧、猶その上は澁染の直垂までつけて、奥深く甘き心を祕するは、餘ならずや。あるも余は栗を愛す。余が二年餘寓したる邸の内には、栗の木多ありき。初夏の頃にもなれば、青々と茂まる梢は、形も色も海軍將士

ふさく  
と  
さわく  
と

の肩總そのよくなる花、ふさくと咲きて青空に映りたる、流石に棄てらまぬ趣あり。星多き夏の夜の空を、眞黒きその梢のさわくと摩でて戦ぐは、涼しきものなり。

井戸側に一株の栗あり、初冬の頃は大きいなる葉枯き、乾き落ちて堆を成す。余はをりく朝ほのぐらき中に起きて、葉疎らなる枝に有明の月のかゝるを見き。

鹽原の山深く秋を探りし時、薄ぶちなる山腹に、二抱程の栗の木、山焼けなどに會ひてにや、根は半ば焼けて空洞になりたるを、こゝかしこに八九本、十五六本、山腹よりさく出でて、十分に枝を廣げ、盛んに黄葉モミナくするを

ざくと

はじく  
ばらりと

山ふかみ  
はらくと

見しは、嬉しありき。  
山路行きて、その毬に草鞋ざくと踏みかけゝるはねゝ  
けまど、落葉満空山の匂など誦して、獨り山深く辿る時、  
毬のおのづらははじめて、實のばらりと落つるは、閑寂  
そのものの聲を聞く心地す。  
「山ふかみ、峰のさゝ栗はらくと庭に散りしく大原の  
里」とは寂然法師の歌なり。

徳富蘆花

二一 逗子の冬

北風を背にし、枯草白き沙山の崖に腰かけ、脚なげ出し  
て、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、

知る

解けもえせず

停めなば

六代御前は平維  
盛の長子、この  
地にて斬られた  
り

沖より歸る父の舟遅しと待つ逗子邊の童の心、その淋  
しさ、うら悲しさは如何あるべき。御最期川の岸邊にし  
げる葦の枯れて、潮風に騒ぐその根かたには、夜半の満  
潮に人知れず結びし氷、朝の退潮に破られて残り、ひね  
もす解けもえせず、白き線を水際に引く。若し旅人疲れ  
たる足をこの溼に停めなば、何心なく見廻して、何等の  
感もなく行き過ぎ得べきか。見かへれば、彼處なるは哀  
を今も七百年の後に援く六代御前の杜なり。木枯その  
梢に鳴りつ。  
落葉を浮べてゆるやかに流るゝこの沼川を漕ぎ上る  
舟、知らず、何れの時、心地よき追分の節面白くこの舟よ

あらず

り響き渡りて、霜夜の前ぶれをか爲しつる。あらず、あらず、唯見る、何時もく、物言はず、笑はず、謠はざるをこの、農夫とも漁人とも見分け難きが、淋しげに櫓あやつるを。

鍬かたげし農夫の影の橋と共に臙に川面に映る、かの舟音をなくこれを搔亂し行く、見る間に舟は葦がくれ去るなり。

鐙摺は逗子附近の海岸の地名

畫めく

人らし

立てて

日影なほ鐙摺の端にたゆたふ頃、川口の淺瀬を村の若者二人裸馬に跨りて徐かに歩まする、畫めきたるを見ることもあり。かゝる時、濱には見わたす限、人らしきものの影なく、曳き上げし舟の舳に止れる鳥の、聲をも立てて

ものうげ

てで、羽打ものうげに鎌倉の方さして飛び行く。

(國木田獨步)

### 二二 鳥居元忠

慶長五年は二二六〇年  
徳川殿は家康、  
上杉中納言は景勝

侍り

慶長五年六月十七日、徳川殿上杉中納言を御退治あるべきにて、奥に向はせ給ふ時、元忠を始めて宗徒の御家人を選ばれ、伏見の城に留めらる。かゝる所に上方また一時に兵起り、秀頼の御使伏見の城に來りて、その城速に開き渡すべき由を下知す。元忠その由を聞きて、吾等がこの城に残り留りし事、かゝる時の料に侍り、參らする事叶ふべからず。猶も參らせよと候はんには、唯攻め破りてこそ取り給ふべけれ。と答へて、城下の人家焚き

寄せ來

拂ひて、寄せ來る敵を待つ。元忠人々を本城に集めて、多からぬ御方こゝかしこ助け合はん事叶ふべからず。唯各が固めたる所を能く防ぎて、他の勢を頼み給ふべからず。今生の見參只今を限とす。いざ最期の名殘惜しまん。とて、酒宴してこそ遊びけき。

都合

思ひ切る

斯くて七月晦日の夜、上方の軍勢都合九萬三千七百人、城の四面に押寄せたり。城内には思ひ切つたる究竟の兵籠りたれば、たやすう落つべしとも見えぬ。明くれば八月朔日、城中忽ちに返り忠の者出來て、本城に火かかり、敵こゝかしこに入る。元忠が手のもの百三十七人戦死し、殘る所僅に四十八人、家子郎從はや御自害あるべ

返り忠

家の子郎從

見せんす

し。と勸む。元忠あざ笑ひて、いや／＼思ふ子細あり、自害をばすべからず。かけひき自在ならねども、いでさらば最期の軍して、汝等に見せんす。とて、城中より斬つて出で、思ふ様に戦ひ、年積つて六十二歳、秀頼の足輕大將雜賀孫市重次に討たれけり。

新井白石

二三 宇津木靜區

人とはぬ深山の奥にさく花の

かぐはしき香を誰あゝるらむ。

と詠ぜしは、人の己を知ると否とをとはず、能く芳香を放ちて、みづあら潔くする谷間の蘭を稱するにあらず

や。宇津木静區、學博く識高くして、能く人の師表するに  
足り、經濟の才に優きて國家の事に幹するべき身の、一  
朝不幸にして大鹽平八郎の難に遭ひ、大義名分を明か  
にして、一步も枉げず、若も師弟の義を履みて終に兇  
手に斃き、名を隱晦の中に没せしむ如きは、まことに雪  
中の梅花、幽谷の蘭に比すべきなり。

遊ばんもの  
一味  
今しも

静區は彦根の人、學成りて後九州を遍歴し、四國を周遊  
し、一たび故國に歸りて父母を省し、更に東北諸國に遊  
ばんものと、去りて大阪に至り、直に大鹽の宅を訪へる  
に、この日は即ち二月十八日にして、大鹽の一味の者ど  
も相會合して、今しも密議の眞最中なり。静區の來るを

肝膽を吐く

坐視  
惻隱

見て大鹽いさく打悦び、萬卒は得易く一將は得ぶし。  
今宵宇津木の招おぼして來まるは、即ち天の我が舉を  
助くるなりと。固より静區の氣象を知らることなれば、  
毫も遲疑するところなく、直に密議の席に伴ひ、肝膽を  
吐きて、隱謀の次第を逐一に語り、宇津木の意見を問ふ。  
宇津木静區に始終を聞き終へ、大息して言ひけるは、君  
子その位にあらざればその政を謀らずとは言ひな  
ら、今日既に斯の如き危急の極に陥り、人民の慘狀さば  
あり甚だしきに至らんには、いゝのであるこれを坐視すべ  
き。よりて先生致仕の御身をも顧るに違あらず、町奉行  
を勧誘し、又御城代に建言するお如き、惻隱の發するま

首領

ことに已むべからざるものとこそ申すべかれ。さりながらその言にして聽あれず、策にして用ひられざらんには、これ即ち天なり、命なり。偏に浩嘆の外は候はず。ざるを何ぞや、自ら殺伐を企て、二百餘年の太平を亂して、亂臣賊子の所業に倣ふことの候ふべきか。昔孟軻氏齊梁に客とりし時、凶年に際し救餓の策を進めて用ひられざりしをば、直に臣するを致して去まるは、先生の熟知し給ふ所にあらずや。未だ聞あば、身徒黨を結び、倉廩を毀ち、積粟を散じ、飢餓を救ひしことありしを。願はくは先生三思を煩はせらま、斷然この非擧を思ひ止り、幾百人の首領を完からしめ、汚名を千載青史に遺し給へ

ざらん事を。」と赤誠面に顯きて、憚る所なく直諫す。

大鹽聞きて茫然とりしを、良ありて容を改め、聲を正しくして言ひたるは、天晴の諫言心肝に銘じ、夢の覺めたる如し。この企は即座に斷念し、更に隱者の操を潔くし、高く世外の雲を踏みて、永く風月に伴ふべし。座中の諸氏も亦各、その意を諒せられよ。さるにても子に至誠の諫により、妖雲迷雾一時に散じ、光風霽月に對すること、何の喜あこれに過ぐべき。とて酒宴を設け、あり合ふ座客を饗應す。

諫す  
光風霽月

ありしほどに、靜區は旅路の疲もあまばとて、その席を辭して寢所に入り、急に矢立の筆をとりて、父兄への

間髪を容れず

書翰を綴り、一束の頭髪を切り、これを添へて封緘し、従へ來りし従者を呼び、密に告げて言ひけるは、吾思ふ旨あれば、汝は今より忍びて此處を逃き、急ぎ吾の郷里に到り、この一封を父兄に參らせよ。時刻移らば不便を生ぜん、疾く行け。」と命ずまば、従者は打驚き、そは何故」と言はせも果てば、天下の大事、間髪を容まば、委細はこの書に認めおけり。はや疾く」と急おし立て、夜に紛きて跡を晦ましむ。

同門

靜區今は心安しとて靜かに枕につき、一睡の後、厠に行ゐんと寢所を立ち出づる折し、あまき。同門大井庄一郎手槍を揮つて現き出で、宇津木氏、先生の命により、君の

王學とは支那明の王陽明の唱へたる學派

一命申し受く。」と肋下目おけて突き出すを、靜區は騒げる色もなく、左手に手燭を取りしまし、身を翻して引き外し、右手もて槍首をしつかと握り、やあ待まよ、大井氏、死は固より覺悟せり。只僕一言あり、願はくは先生に告げよ。先刻先生我が諫を容まられざるは、姑く佯り従はましのみ。されば今夜を出でずして事のことゝに及ばんことは、我先生の眸子にて既にこれを察しより。先生の企決して成るべからず、成らずとも先生に於ては仁を求めて仁を得りとし、毫も遺憾ならん。只憾むらくは成敗を以て人を論ずる者、先生のこの舉を以て狂と譏り、暴と嘲り、咎を王學に歸するに至らんことを、吾



お今日君父を棄てて師の爲に死する所以は、只死を以て諫むるにあらず、死を以て言を漏さざるを示すのみと。槍首放つて縁側に坐し、襟を披き、いざとて腹突き出せば、庄一郎も槍取り直し、御免あれと言ひも果て、胸膈深く突き入れり。憐むべし、静區は今年二十九歳、道文武を修め、德智勇を兼ね、末頼もしき壯者なるに、一朝不慮の厄運に際會し、確乎不動の節義を持して、徒らに闇昧クラヤシの中に埋没せしは、惜しむに堪へざるなり。

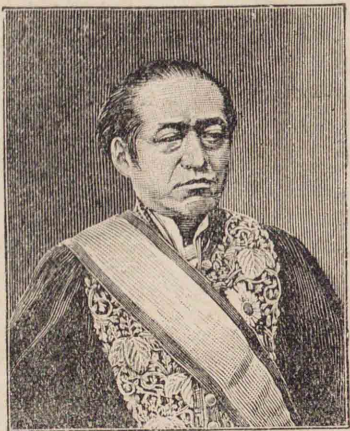
〔中村秋香〕

### 二四 病床より

此程は存じがけなく途中變事に遭ひ、誠に言ふべから

この書簡は、岩倉具視が明治七年一月十四日、参内の歸途、喰違にて難に遭ひし時、辛くも死

を脱れ、宮内省に留りて創を療したる時、叔母の洗子といふ人に書き送りしものなり



岩倉具視

ざる次第に候へども、幸にして一命に拘り候ふ様の事は決して御座なく候ふまゝ、必ず御安心願ひ参らせ候。就いては御老年に方り、斯る御心配かけ参らせ候ふ事、何とも深く恐れ入り参らせ候。併しなほ元より一點の私心なく、只管國家の御爲と存じ上げ候ふ外なく候へば、少しも天地に恥づる所はなく候。亦古今珍しき大變革の御時節なれば、御旨趣のわからぬ者も多くこれ有るべく候へば、斯様の事なしと申し難く、致し方もなき

あらせられ

あらせられ

下され

事に候。御承知もあらせられ候ふ通り、和漢洋ともに國家の御爲に不慮の難に遭ひ候ふ事は、例少あらぬ事に候ふまゝ、何事も我々大君の御爲に成り行くものと思召しあきらめさせられ候ふ様願ひ上げ参らせ候。今日は一段快く相覚え申し候ふにつき、御心配相掛け候ふ御断までに、一筆申し参らせ候。此上は御安心下され候うて、兩三日中には歸宅候ふまゝ、御待ち下されべく候。かしこ。

今日の書面

二五 手紙のかき方

書簡文は趣旨を通ずる爲のものなれば、日夜に生ずる

咄嗟

繁縟

典故  
展讀

菅茶山は約百年  
前の備後の儒者

千種萬般の事項に應じ、咄嗟の間に能く之を記述し、西に東に頻繁多端なる用務を辨ずるを要す。従つて文章の優麗典雅ならんよりは、むしろ平易簡潔にして繁縟ならず、趣意明瞭にして解し易あらんことを望むべし。故に新奇難澁の文字を用ひ、まゝは普通一般に行はれざる典故を引き、展讀に不便を生ぜしむる等のことは、務めて之を避くべきなり。されど簡單を主とすといへばとて、無味淡泊その趣旨を盡さざるが如きことありては、その事の辨ぜざるのみならず、時によりては大いに不都合を來すことあるべし。菅茶山曾ていへるあり、書札の文字にも死活あり。たとへば一筆啓上仕り候より

寒暄

思ひやらる。

思はる。

御無事御堅固云々、私宅恙なく折角御自愛、猶後音を期す云々は書くも書ぬも、何程の事もなきなり。さるをこの間の寒氣にわぶ郷は海濱に氷を見、或は半月一月の早なるによそには夕立しれども、こゝには降らずなどいふは、同じ寒暄を敘ぶるにも、その地の氣色も思ひやられて、書狀の文字を活すなり。月日の末にこの書認めたる時は雨しきりにふり、時鳥二聲三聲おとづれぬなど書きたるは、いよく、その時その人の姿も思はるゝやうにておもしろし。長さ三尋あまりある書札にても死にたるあり、三行四行の書にても活きたるありと。是まゝ心得おくべきことなり。

〔中村秋香〕

二六 古羅馬氣質

カウキ

習

昂然として

ケーヤスマルシヤスは古羅馬の名族の出なり。屢兵馬の間に入出して、功を樹つること多く、特にコリオリ町がボルシ人に陥れられしを回復して、コリオラナスの稱號を得たり。平民を賤しむは當時の貴族の習にして、コリオラナスは功を恃んで自ら高くし、彼等が漸次權力を得るを見て、心中甚だ快からず。嘗て國事を議するに當りて、侮蔑の辭を放てり。平民深くこれを憤り、迫りてその會に出でて陳謝せしむ。

コリオラナス昂然として曰く、余功ありて罪なし、何ぞ

袂を拂ふ

故國

もし用ひば

もし舊怨を報  
せんと欲せば

長驅

節を屈して平民の前に立たんや。とて、袂を拂つて羅馬を去る。忘恩の奴輩、汝等が後悔は遠からず。と罵りて、その敵ボルシ王タリヤスの城に行き、王に謁して曰く、吾の名はケーヤスマルシヤス、稱號はコリオラナス、わが戦功の記念は今この稱號あるのみ。故國を放たれ、來つて王の軍に投ず、王もし用ひば努力せん、もし舊怨を報せんと欲せば、吾を撃つと。タリヤス喜んでこれを用ひ、兵に將として羅馬を討たしめたるに、連戦連勝、長驅して城門に迫れり。城内騷擾して爲す所を知らず、評議を重ね、使節を選びて和を請はしむ。コリオラナスこれに對へて、余はボルシの將な

誅求

手を束ぬ

旦夕の間

使

り、ボルシの爲に謀らざるべからず。とて、誅求甚だ峻酷なり。使者これに應ずる能はず、手を束ねて歸れり。赫々たる大都の名譽も泥土に委し、羅馬の運命は旦夕の間にある。城中には窮迫の餘一計を案じ、コリオラナスの母ポリニヤを使とし、その妻子をし



コリオラナスの母の愁訴を聽く

斥、退

うみ  
母ぞや  
責めらるゝぞ  
や

てこれに従はしむ。コリオラナス更に使節の來るを望み、直に逐ひ還さんとしたりしが、近づくに隨ひて見れば、わが母なり。恩愛の情いつとてか變るべき、忙しく出で迎へて、これに縋りつかんとす。母斥けて曰く、「御身はケイヤスマルシヤスにして、吾はその母なるか、抑も御身は敵將にして、吾等はその降人なるか、まづこれに答へよ。」コリオラナス黙して物心はず。母は言を繼いでいふ、「謀叛人の母よ、國を滅す大逆無道の武士のうみの母よ。」と罵らるゝものはこの母ぞや、この母ばかりが責めらるゝぞや。わが身だに子を生まずば、わが國は今も榮えなん。されどわが身は老いぬ、いつまでか苦しむべ

奴隸にすと

歎

腸を斷つ  
懽然として

き、唯御身の妻と幼き兒との上を思へ。御身はその國を奴隸にし、併せてその妻子を奴隸にすとは知らずや。」流石に猛き大將も母の言に氣挫け、涙に咽ぶ妻子の歎にも腸を斷ちて、獨り懽然として俯き居たりしが、やうやくに心や決しけん、「母上、御身は羅馬を救ひたまへり、されど御身の子を失ひたまへり。」とて、兵を引いて還りぬ。かくて程なくコリオラナスは民衆に殺されたりといふ。

二七 山岡鐵太郎

明治維新の際、前將軍慶喜は上野寛永寺に退居して、專

軋轢

心恭順の意を表すれども、幕臣のこれに従はざるもの多く、軋轢紛擾抑へ難く、人心恟々たり。慶喜日夜焦慮すれども、施すに術なく、意志を疏通せんとするにその人なく、關東の野空しく大亂の起るに任せざるべからざるかを歎ず。その臣高橋伊勢守申す、麾下の士多しといへども、この任に當るもの、義弟山岡鐵太郎あるのみ。然れども公果して小祿の士を重用し給ふ」と。慶喜乃ち鐵太郎を召す。

懇勸

鐵太郎召に應じて至れり。慶喜懇勸に命じて曰く、「わが意は只管天下の太平を計るにあり。微衷未だ通ぜずしてまづ賊名を蒙る、無念この上なし。汝速に官軍に到り、

貫徹

百方力を盡して、わが意を貫徹せしめよ。」とて、涙言と共に下る。鐵太郎輒く應ぜず、仰はさることながら、或は他に御企ありて、一時を彌縫せんとし給ふにあらざや。」と押し問ふ。慶喜曰く、「吾に異志なし、誓つて勅命に背かず。」

彌縫



山岡鐵太郎

「然らば微臣引受け、必ず御意を徹底せしむべし。臣が眼の黒きうちには、斷じて御憂慮あるべからず。」と對へて、辭して出でたり。

鐵太郎は幕臣小野氏の子出でて山岡氏を襲げり。劍を學び禪を修して、意氣精悍、衆鬼鐵と綽名してこれを忌憚す。今や絶大の任を受け、二三の重臣に謀れども應ずるものなし。乃ち軍事總裁勝安房守を訪ふ。安房守も直にこれを引見せず。鐵太郎強ひて面會を求めて、己が任務を告ぐ。安房守未だその人と爲りを知らずして、遲疑の色あり。鐵太郎大喝一聲して曰く、事今日に至つて何をか躊躇する。安房守曰く、然らば問ふ、この際幕府の取るべき方針は如何。曰く、また朝幕の別なし、たゞ舉國一致あるのみ。安房守豁然悟る所あり、更に官軍の陣營に入る手段を問ふ。曰く、臨機應變策はおのづから胸中に

人と爲り

大喝一聲

何をか躊躇する

舉國一致

臨機應變

六郷川は多摩川の下流なり、東京の南約三里の處を流る

辟易

晝夜兼行

誰か好んで人を殺し國を騒がさん

湧くべし。安房守その確乎不動の精神に感じ、手書を裁し、携へて官軍の本營に至らしむ。時に官軍の先鋒は既に江戸に近づいて、六郷川の彼方にあり。鐵太郎その前に進みて、大音に朝敵徳川慶喜家來山岡鐵太郎、大總督府へ通る。と名のる。前後の銃隊辟易して敢へて近づく者なし。それより西に向ひて晝夜兼行し、やがて静岡に着して大總督府に入り、參謀西郷吉之助に面謁せり。鐵太郎徐ろに問うて曰く、この度の御東征は是非を論ぜず進撃する御趣意なるか。吉之助答へて曰く、誰か好んで人を殺し、國を騒がさん、唯己むを得ざればなり。曰

何の要あつて  
か發向する

く、わが主既に謹慎して罪を待ち、生死共に朝廷の御沙汰に従はんとするに、大軍何の要あつてか發向する。曰く「されど幕兵の反抗するもの多く、既に甲州には戦端を開けりとさへいふにあらずや。」曰く「賊徒の所爲はわが主の關する所にあらず。公正無二の志貫徹せずして、空しく脱走の輩と混視せられんこと、慶喜が終生の憾なり。ふれを訴へんが爲に鐵太郎をして推參せしむ。願はくは旨を大總督宮殿下に傳へたまへ。」吉之助容易に肯んぜず、鐵太郎毅然として曰く「愚衷察せられずんば、只一死あるのみ、麾下八萬命を棄つるものまた一人にあらず。抑、天子は民の父母なり。理を明かにして不逞の

宮は有栖川宮繼仁親王

不逞の徒

討ずるをこそ  
王師とは申せ

肺腑を衝く

預く

徒を討ずるをこそ王師とは申せ、謹慎恭順、一意朝命を待つものに對しても、御宥免なくば、わが國家を如何せん」と、至誠の情、人の肺腑を衝く。こゝに於て吉之助は宮に伺候し、御書を賜はりてこれを鐵太郎に傳ふ。書中五箇條の命令あり。鐵太郎一々拜承したれども、唯末條、慶喜を備前に預くる事とあるに至り、この一箇條は斷じて御請なり難しと對ふ。吉之助曰く「朝命なり。」鐵太郎曰く「たとひ朝命なりとも承服し難し。」吉之助言ふこと前に同じ。鐵太郎押返して、「しからは假にかれこれ位置を易へて見よ。もし貴藩に罪あらん時、足下はその主を差出し、安閑として傍觀するを以



干戈

て、君臣の義となすか。余に於てはこの條決して忍ぶ能はず。とて、辭色頗る厲し。吉之助默然として沈思し、良久しうして曰く、諾、徳川殿の事は吉之助引受けたり」と。かくて鐵太郎は東歸して、談判も調ひ、府下百萬の生靈、今しも干戈の下に叫喚せんかと思えしもの、事なくして止み、維新史の末頁は不祥の大禍を見ずして終れり。

### 二八 日蓮上人

こは  
カづく

世に英雄豪傑とだにいへば、軍人、政治家などに限る如く思ふものあれど、こは甚だ誤れり。軍人、政治家の事業は、表面は如何にも派手なれども、唯力づくにて敵を亡

謂はば

人類

眇たる

し  
數ふるに違な

し、國を取り、或は時運に乗じて政權を掌握するに過ぎず、謂はば間口のみ廣くして、奥行の淺き生活なり。さればその事業は、その當時こゝろ天下の耳目を驚かせども、後世に傳りて、永く人類を支配すること能はず。この點に於て、宗教家の仕事は世に竝なく大いなるものなり。釋迦、基督、孔子等は、その當時にては眇たる一個人に過ぎざりしが、その勢力は數千年後の今日に隆々として盛んなるに非ずや。印度、羅馬は既に亡び、支那歴代の變遷數ふるに違なき程なれども、佛教、基督教、儒教は依然として人心を支配せり。

日蓮上人は、日本宗教家の中にて第一等の人物なり。嘗

溢美

喝破

極致

に宗教家として第一等の人物なるのみならず、單に一個人として見ても、その人物の偉大なること古今殆どその比を見ずと謂ふも、溢美にあらざるべし。安房の漁師の家に生れながら、少き時より宗教改革の大願を起し、京都、奈良及び關東の諸國に歴遊して、佛法はいふに及ばず、神道、儒學一として通ぜざることなく、殆ど天下の知識を學び得たる後、茲に法華經を以て佛教の極致と證悟し、當時流行せる諸宗派を攻撃して、法華宗の一派を開けり。素より天下に一人の御方もなく、四面悉く法敵なる中に、この新宗派を宣傳して大膽にも眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔と喝破せり。しかもこの新宗

迫害

檀越

派を唱へたるは、念佛者、禪宗信者等の充滿せる鎌倉の眞中にてありしかば、執權北條氏を始として、諸宗の僧侶はいふまでもなく、鎌倉中の信徒皆舉りてこれを迫害せり。日蓮いさゝか臆し恐るゝことなく、法華經の爲に命を捨つるは、砂に黄金を代ふるが如しとて、益、その教を弘めたり。

彼はこの爲に住所を逐はるゝこと二十餘度、或は暴民に夜襲せられて庵室を焼かれ、或は法敵に要撃せられて眉間を割かれ、或は弟子を殺され、或は檀越の所領を召し上げられ、或は伊豆のはてに流され、佐渡の島に追ひやられ、或は龍口にて首斬られんとし、打撲刀創身に

人間業

絶ゆることなし。かくの如き迫害に遇ふこと前後實に二十年、されど風大なれば波亦いよく大なるが如く、少しもその當初の志を枉げず、身命を塵芥の如く輕んじ、偏に法華經の眞理を弘通して、天下を救はんとせり。その事蹟を思ひやれば、心も言葉もなかくに及ばず、實に人間業ならず見ゆ。法華の宗旨如何は措き、その宗祖たる日蓮の人物は實に千代萬世の龜鑑たり。

(高山林次郎)

二九 田舎と偉人

必ずや

世人常に謂ふ、英雄豪傑の士は必ずや隴畝の間より崛起し、曾て都會に生れずと。固より篤論にあらずと雖も、

後昆

老ゆ  
齷齪  
屏息  
天地狹隘  
宇宙窄小  
伸ぶ

蓋し一世を動かす英雄豪傑は多く村落邑里より出づるが如し。即ち豊臣秀吉の中村より出でたるが如き、ビスマルクのフリードリッヒスルーより出でたるが如き、彼の他擧げ來れば、苟も名を當代に擅にし、譽を後昆に垂れたる學者、事業家、詩人、義士の、身を村閭茅屋の下より起して、遂に天下に雄飛するに至りし者極めて多し。これ都會に生れ、都會に長じ、都會に老い、畢世齷齪として都門の中に生活するは、猶畢生一家中に屏息すると同じく、天地狹隘、宇宙窄小、更に活潑、清澄、宏大、雄壯なる心氣の伸ぶるなければなり。それ身都門の中に生活し、而して身體を強固にし、精神

旺盛

歸るや。

涵養

を旺盛ならしめんには、時に郊外に散策して自然の壯觀を眺め、以てその身神を養ふに在り。郷里の地や、都門を距ること或は二十里、三十里なるもあらん、或は百里、二百里に上るもあらん。然れども舟車の便を假らば、均しく比隣の如きのみ。故に往くに鐵路若しくは船舶に依り、而して歸るや亦これに依らば、日曜日天朗かなる時、近郊に遊ぶと何の異なる所かあらん。抑都門の紛々囂々たるは、人生の爲に必要ならざるにあらずと雖も、一層大なる志氣を涵養せんには、都門を離るゝこと遠く、山高く、水長く、萬境自然なる處に於て清淨なる空氣を呼吸せざるべからず。血氣未だ定まら

際してや。

逍遙

ず、身神猶堅固ならざる時に際してや、その學業の暇、幸に故山に歸るが如き機會あらば、道途を迂廻して、名山大川の間を逍遙し、時には孤枕を山驛の夢に欹てて遠く猿兒の叫ぶを聞き、時には山徑欹危、細棧纒に通ずる所、岩もる水を掬して以て渴を醫する、これ洵に務めて試むべし。

三宅雄二郎

三〇 都人の手紙

お啓然れば市の上天気晴居して喜お胸の  
 事とて遊遊を頻に動きまに一作お持ち作

經ざるあり

寫真機械のまだ一着もよも経ざるありて其  
中をあたにこして難く或は途上好図様と評す  
るありんを遠た思ひ立ちて早稲田迄まで  
と志し作を午坂一時原に有る作  
鶴巻町より田圃に出づれば直に一面の榛の本  
林にして其のあなただに本隠れて獨り畑おつ男  
居たり其の少々が鏡籠と姑のひ日下駱掛ま  
貽<sup>オカシ</sup>鴨ふとと遠く廻し作も此邊にそと遠く  
持の村田鏡のも鏡と令りのも鏡カメラの  
伎倆とは何ぞお似たるの甚だしきと心  
私かた可笑しく存じ作

何ぞ相似たる  
の甚だしき

寫さんもの

此畑お畫の成るべし字をいふれ何れもやと  
思ひゆり田を横ぎりて園の境に出でんと  
畦道づつとたをりし際西のやうに一株の嫩  
雪ありて痛げに照るんが甚だ面白くそんを  
坂邊のまた老樹の昔のぬくなるを流るす  
してけきやをさうんもの或は隠したに或は  
有たたに或はさく低く短た位迄の工夫致ん  
ひしまに激風起りてやうはづましか消え失せ  
中作かゝる例は予が鏡籠に於ても屡々遠く  
せし所に流るん  
去つて野の稻をるぬい途た二小兒の身も

汲むに遇ひれば、若く立ち、面より、髪を梳かして  
 る子、れ、乃、と、道、を、また、み、底、を、か、き、と、り、作、が  
 嬉、し、き、た、る、を、教、へ、と、一、照、し、再、び、彼、椿、の、木  
 林、の、方、を、望、み、み、よ、は、前、の、や、う、に、空、一、く、は、い  
 る、ゆ、に、又、暗、や、の、縁、く、横、を、り、り、て、眠、ま、る、が  
 ぬ、き、が、現、れ、る、万、多、く、く、寫、し、取、り、作  
 なる、此、等、を、徒、や、又、歩、き、廻、り、う、ら、な、疲、れ、て、お、た  
 物、は、ば、お、月、出、掛、ひ、て、浴、に、越、ま、る、が、先、に、嬉  
 し、き、は、極、上、の、鐵、瓶、沸、く、と、し、て、煮、え、たり、早  
 未、だ、茶、を、い、れ、ん、と、獨、り、ひ、し、め、か、す、折、か、ら、う、岩、代  
 の、友、と、る、と、干、柿、を、贈、り、來、る、に、會、ひ、互、に、色、と

ひしめかす

折き其一枚を喰して濃緑の熱茶に嗽ぐ快  
 謂ふづからず作撮影の結果は是なるに  
 了るべく候草

(紅葉音輪抄による)

三一 農業は健康を養ふ

農は健康に適する職業にして、農民は最も健康なりと  
 せ、古今各國の等しく認むる事實なり。ワシントンが「農  
 は、人民が職業の中、最も健康に適ひ、最も貴重にして、最  
 も有益なるものなり。」と云へるは、古來人口に膾炙する  
 所、又ゲーテの言に、「黄金をも魔術をも藥餌をも要せず  
 して長生する道は、田舎に退隱して、希望を小にし、交際

澹泊

迎ふとも

豊饒

適すとせば

涉獵

に遠ざかり、澹泊なる食を取るにあり。約言すれば禽獸の如く生き、形骸を土木にし、親ら田圃に培ひ、肥料を施すを厭悪せざるにあり。斯くなさば、八十の高齡を迎ふとも、尙豊饒たるを得べし。とあり。余はこれ等の古人の言に徴し、その他實際の事實に鑑みて、農業は果して身體の健康に適するものなるか、若し適すとせば、その程度幾何なるべきかを研究せんと欲し、數多の冊子を涉獵し、若しくは統計に索ねて、聊か得る所ありあり。

この問題たる、もと一場の空論にあらずして、最大なる活問題なり。わが國は元來農業を以て國本となし、國民の四分の三は農を恆業となす。かくの如く農家の多き、

瞭然

一國の衛生に如何なる影響を及すか、國民の氣象に如何なる影響を及すかを講究するは、實際に必要な問題なりとす。我が國の徴兵に關する精密なる統計は、各府縣に備りて、若しこれを一覽せば、徴兵合格者が田舎に多くして、都會に少きは、直に瞭然たるべけれども、但該統計が世に公にせられずして、余輩の自由に閱覽する能はざるは、甚だ遺憾とする所なり。

然れども農民の體格が他業者に優ることは、敢へて統計的證據を擧ぐるを要せず、統計なき時代に於ても亦既にこの事を認めたるもの少からず。熊澤蕃山の大學或問に、「農兵とならば本邦の武勇格別強く、眞の武國の

名に叶ふべし。士農別れてよりこのかた、身病み、手足弱くなりぬ。心ばかりは勇むとも、敵にもあはで疲るべく、病死もすべし。といへり。これを以ても、農は健康を助くる職業なるを知るべし。

(新渡戸稻造)

訂補新體國語教本卷六終



*T. Nakamura*

明治四十一年九月廿八日印刷  
 明治四十一年十月二日發行  
 明治四十一年十二月十日訂正再版印刷  
 明治四十一年十二月十五日訂正再版發行  
 明治四十四年十一月廿一日修正三版印刷  
 明治四十四年十二月廿四日修正三版發行  
 明治四十五年二月八日訂正四版印刷  
 明治四十五年二月十一日訂正四版發行

訂補新體國語教本  
 每卷定價金貳拾六錢



著者 故藤岡作太郎  
 補訂者 藤井乙男  
 發行者 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 西野虎吉  
 印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 荻原勝次郎  
 發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 関成館  
 西部販賣所 大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角 三木佐助  
 東部販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地 林平次郎



